



咲り返
著葉柳



始





95163
805



カ
ヘ
↓
ガ
キ

大正
5. 11. 22
内交



はしがき

世の中よなかに、戀愛れんあいほど奇くしきものはない。一婦人ひとにんに迷まよひて一生しやうを誤あやまり世よの劣敗れつぱい者しやとなり、或あるは一婦人ひとにんの力ちからに依より成功せいこうをする者ものも又少またなくない。こゝに著あるかへり咲さきの一篇ぺん、文ぶんの妙めう、想さうの奇きはなくとも、乞こふ。江湖かうこの諸彦しよげんよろして一讀ひとくあらん事を。

八月下旬

都下の一隅に於て

柳

葉





かへり咲

小説かへり咲
目次

○ 黄	○ 蚊	○ 朧	○ ち	○ 齋	○ ち	○ 暑	○ 奇	○ 凶
昏	り	夜	道	友	ひ	り	縁	報
.....
一	十四	二十八	四十二	五十四	六十五	七十七	八十四	九十五

目次

かへり咲

○酒	○光	○こ	○夕	○點	○手	○心	○再	○曲	○奇	○貸	○相
の		、	明	燈		の	思				
泡	明	ろ	り	頃	紙	ひ	會	者	遇	間	談
大											
三											
二百七十二	二百五十九	二百四十四	二百三十二	二百二十一	二百十	二百一	二百八十五	二百七十三	二百六十六	二百五十六	二百四十八

かへり咲

○其	○路	○別	○嫌	○さ	○初	○魔	○殘	○塵	○鐵	○雨	○友
人	次	れ	ひ		對	の		の	假	降	目
此	の	の	な	な						る	情
人	奥	袖	人	み	面	手	乳	巻	面	日	大
二百三十二	二百十九	二百三	百九十四	百八十四	百七十五	百六十一	百四十八	百三十七	百二十六	百十四	百六

○か	情	三百八十四
○同	情	三百九十五
○引	あはせ	四百七
○忠	告	四百七
○そ	の夜	四百三

目次終

小説かへり咲

河内柳葉

黄昏

西に廻つた日は酷しく耀やいて、青葉繁れる梢に春は開けた。其六月初旬の夕、新宿停車場に程近い日除の原を、そゝろ歩きをしてゐる十八九の學生がある。蒼白い顔は病身らしく見えるが、丈の高い、容貌の引緊つた、眉の濃く太い、目つきも口許も凛々しいが、打見たところ愛嬌に乏しい相をしてゐる。服装は洗酒の久留米餅の單物に、形の崩れた烏打帽子を冠り、後の滅つた桐の駒下駄は、柱目も別らぬ程穢れて、手に持つ細い洋杖も伊達とは見えす、時々其上に兩手をかけて、少時

■ 黄 昏

息を吐いてゐた。

■黄 昏

二

四時も過ぎ五時も過ぎて、長い夏の日も漸く暮れかゝり、廣くも無い原は紫色の夕靄に包まれ、大空の一方に十日ばかりの夕月が、朧氣に光を放ちつゝ見初めた頃になつても、彼は立去る氣色もなかつた。

表通りに驚しい、豆腐屋の喇叭の音が聞え、續いて新聞配達達の鈴の音が聞え、彼は俄かに氣付いたやうに、徐かに通の方へ歩を運ぶ途端、彼の肩を軽く打つた者がある。彼は驚いて振かへり、肩を叩いた主を見れば、色の白い、細面の、年齢は彼と同じく十八九、髪は銀杏返しに結つた、容貌の水際立つて美しい娘が莞爾に笑ひながら立つてゐる。

「あゝ、花枝さんか。」と、云ひつゝ彼は、長い溜息を喟と吐いたが、又力無く歩を運ぶとき、花枝と呼ばれた美しい娘は、彼の肩に手をかけて、
「今日は少し好いの？」

「いつも同じ事さ。」と、學生の答は素氣ない。

「然う。」と、花枝といふ娘は心配さうに男の顔を覗き込み「困るわねえ。」

男の言を待つ花枝は、いつまで経つても男は何とも云はないので、彼女は聊か物足りない思ひをしながらも、再び男の顔を覗き込むやうにして、

「友衛さん。」

「え。」と、友衛と呼ばれた學生は、花枝の方に顔を向ける。

「貴方は學校を退學なすつたんですつて？」

「あゝその事か。」

「ほんとの事なの？」

「あゝ。」

「まあ。」と、花枝は案に相違した面色で「貴方にも似合ぬ無分別な事をなすつたのね。」

■黄 昏

三

「君等のやうに局外から見ただ目では、或は無分別な事をしたとも見えるだらう。けれど、これでも僕は種々考へた末なんだ。」

「怎うして？」

「僕が満足に中學を卒業したとして、親父はそれより上の學校へ、僕を入れる事が能るだらうか。高が田舎の小さい一銀行員として、僕を上上の學校へ入れると云ふ事は能まい。僕は斷言する。然ういふ事を思つたから僕は、潔よく退學して丁つたんだ。」

恚う云つた友衛の顔には、胃し難い決心の色が有々と浮んでゐた。

「貴方は此先、怎うなさるの？」

「此先？」と、鸚鵡返しに云つた友衛は、始めて淋しい笑を洩して「此先は、金の余りかからない、而して早く金の取れる學校へはいるより他は無いいよ。」

「まあ。」と、花枝は微笑つ、「そんな都合の可い學校が有つて？」

「有るとも！ 大有だ。」

「何處に？」

「東京にさ。」

「東京は分つてますけれど、何といふ學校なの？」

「それは僕も今盛んに選抜中だが……」

「甚麼學校が可いと思ふの？」

「僕が可いと思ふ學校は、工業學校が可いと思ふんだが……」

「工業學校？ 可いわねえ。で、何處の？」

「神田。」

「神田の何處？」

「錦町三丁目の東京工科學校が可いだらうと思ふ。」

「可いでせう。で、何時からはいるの？」

「そんな事は、分るものか。」

「あら。」と、花枝は目を睨り「怎うして？」

「まだ、確かに其處に定めても了はない中に、はいる時の事は未だ、考へてゐやしない。」

「何故？ 早く入學して、お國の阿父さんや阿母さんを喜ばせて上たら可いぢやないの。」

「君は僕が、單に親の爲を思ひ、親を喜ばせる爲に、中學校を退學したと思つてゐるのかい？」

友衛の意外な一言に、花枝は聊か狼狽氣味で

「でも然うなのでせう？」

「然うだ。それも有るが、しかし……」

「怎ういふ譯なの？」

「それも然うだが、中學校を退學したのに就ては、もつと、もつと深い譯が有るんだ。」

「……………」

花枝は、然ういふ友衛の顔を、固唾を飲んで打目茂る。

「花枝さん！」と、友衛は、底力の籠つた聲で花枝の名を呼ぶ「僕が叔父さん一家の者から受てゐる待遇を怎う思ふ。同じ池島一家の者のやうにして扱はれてゐるか。或は食客として扱はれてゐるか。」

「然うですなえ。……」と、花枝の容子は云ひ憎さうに見える。

「君の家と池島の家とは裏と表だから、僕が常に甚麼待遇を受てゐるか、君も大概知つてゐるだらう。」

「え、それはよく知つてゐますけれど……」

「知つてゐたら遠慮無く云つて見給へ。此日除の原には君と僕の二人きりだ。さ

あ、花枝さん！ 遠慮はいらないから、君の目に映じたところを云つて見たまへ

「……………」

「恐らく、家の者と同様な扱ひはされてゐないと思ふだらう。」

「……………」

「但し、僕の僻み根性かも知れないけれど……………」

「いゝえ」と、花枝は慌て友衛の言を引取つて「そんな事は無いわ。」

「無いとしたならば、僕の……………」

「妾、良く知つてゝよ。貴方が邪魔者扱ひにされてゐるのは。」

「誰が見たつて然う見えるだらう？」

「えゝ、見えるわ。」

「其處だ！」と、友衛は、我ながら驚くやうな大声で云つて「僕が中學校を退學して、金のかゝらない、而して早く金の取れる學校を探したのは。」

花枝は、思ひまうけぬ友衛の言に、愈々不審に思つた。

「僕はね花枝さん。一日も早く食客の境涯から逃れたいのだ。」

「それならば尙の事……………」

「それのみぢやない。叔父さんや叔母さんは僕をたゞ食しておいて、それを恩に着せて娘の清子を僕に押付やうとしてゐるんだ。」

「え！」と、花枝は思はず友衛の顔を見目茂りつゝ、「そんな事が……………」

「有るんだよ。」

「それならば尙の事、早く入學なさらなければ不可ないでせう。」と、云ふ聲さえも怎うした事か力がない。彼女は時々、憂への雲の漲つた顔を擡げつゝ、發と長い溜息を吐いた。

「今國へ其事を云つてやつてあるんだから、國から返事の着次第、明日にも入學する。」

「然うして早く勉強して下さいね。」

「有難う。しかしね花枝さん。僕のやうな者に機械いちりが能るだらうか。」

「して能ない事は無いでせう。」

「然うさ。する氣になつて一生懸命になつたら能ない事も無いだらう。精神一到何事か成らざらんだ。己れに克つ心と、不屈不撓の精神で物事に當れば、何事も能ない事は無いんだ。」

彼は口の中で不屈不撓と、幾度となく繰返した。

x x x x x x x x x x

原の真中を横切る細道を、二人は楽し氣に語らひつゝ、今しも唯或る邸の横手に出た。

見越しの柳の枝が靡く其邸の板塀の角を曲つて、漸く通りへ出た時、出合頭に一

人のうら若い娘に出逢つた。

「まあ。」と、娘は驚いたやうに突立つた、友衛と花枝の顔を等分に見くらべつゝ、

「友衛さん。貴方は今頃まで何をしてゐたの？」

友衛は急に可厭な顔をして、

「散歩してゐただよ。」

「然う。二人で？」と、笑を含ませて云ふ言にも、自と嫉妬の煽が燃てゐる。

花枝は、さも迷惑さうな友衛の顔を見て、

「清子さん。友衛さんは……」と、口籠るのを、清子は倍こそと頷いて、

「然うでせうよ。友衛さんは、一人で散歩する時は、驚く程早く歸つてきますけれど、二人だとい……」と、云ひかけるのを、友衛は慌て引き取つて、

「おい。清ちゃん。お前は何を云つてゐるのだ。」

「いゝえ。妾も大概、お友達か何かに逢つたのだらうと思つてゐましたわ。」

『で、お前は何處へ行くの?』

『妾?、一寸上山の叔父さんのところへ。』

と、清子は今までの言と打つて變つた優しい言で『では、一寸行つてきますから貴方も眞直お歸りなさい。』

『あゝ、直ぐ歸る。』

清子は一寸花枝の方を顧て

『花枝さん。眞直に連れて行つて下さいよ。可い事、頼んでよ。』

花枝は嬌然り笑ひながら

『御心配は御無用。屹度妾が引受ました。』

残り惜し氣に行く清子の後姿を見送つてゐた友衛は、其姿が見えなくなると始めて、

『馬鹿な!』と、吐き出すやうに云つて、花枝と共に、小さな葵橋を渡つて新町

通りへ出た時。

『花枝さん。僕はこれから本屋まで行つてくるから、先へ歸つてくれ給へ。』

『然うですか。では一足先へ歸りますわ。』

『また、その内に逢はう。』

『えい、屹度よ。では、左様なら!』

優しい別れの詞のうちに、心もやがて黄昏の、うら淋しさは二人の胸に應える。

『遠方へでも行くやうだね。』と、友衛は笑ひながら、二足三足隔たれば、顔も自と夕靄の爲に包まれてぼんやり見える。

『花枝さん。』

呼ばれた聲に花枝は、嬌然り笑ひながら振かへり

『何有?』

『今日の事は秘密だよ。』

「えい、分つてゐるわ。」
「ぢや、行つてくる。」と、云ひ捨て行く友衛の身体は、早夕闇の中に姿は見えぬ

蚊や

府下淀橋町角筈の唯或る裏通りに、小體ながらも生新らしい二階建の家がある。
店の片脇に形ばかりの井戸唧筒を据付けて、屋上に掛けた白塗へ黒文字の長方形な
屋根看板には井戸唧筒製造所と麗々しく横一文字に書き連ね、其脇に小さく池島祥
太郎と縦に書き現はしてある。

今しも湯歸りと見えて、濡たタオルに石鹼箱を包んで、小聲で本能寺の詩を口吟
みながら、徐かに歩を運んでゐた桐野友衛は、その家の前で立留る途端、横手の細

道から衝と走り出た十一ばかりの少年が、朧月夜に友衛の姿を透し見て、

「桐野の兄さんですか。」

「秀ちやんか。」と、友衛は束々と其方へ進み寄つて「お使か。」

「いゝえ。僕今まで兄さんを待つてゐたんです。」

「何か急な用でもあるのかい？」

「然ぢやないのです。」

「然うぢやない。」と、自ら其一語を反覆した友衛は、如何にも解しかねる面色で
秀治の顔を見詰めながら「では怎ういふ譯なんだ。」

「あの……」と、秀治は云ひ憎さうに忸怩して「僕、云ひ憎い事なんですけれど
云はぬ譯にはゐかないし。困つたなあ。」と、獨言を云ふやうに云ふ。

「那樣に云ひ憎い事なのかい。」

「えい。」

「しかし。早く云つてくれなければ困るよ。何時までこゝに立ん坊をしてゐる譯には行かないもの。」

「だけど……困るなあ。」と、又口籠る。

「僕の身に關した事か。それとも君の……」

「兄さん！僕、自分の身の上の事ならこんなに困りはしません。」

「すると、僕の身に關した事なんだね。」

「然うです。」

「ふうむ。」

友衛は、自分の身の上に關した事だと聞くと、何となく氣に懸つた。自分の身には何も暗い、後目痛、疚しいところはないけれど。

「秀ちゃん。怎ういふ譯か、早く云つてくれないか。」

「え。」と、秀治は再び忸怩してゐたが、急に思ひ切つたらしく、偶と顔を上げて

「兄さん！僕、思ひ切つて云ひますよ。」

「うむ。早く云つてくれ。」

秀治は上目使に二階を見て、

「兄さんは今日、海老原の花枝さんと散歩してゐたんですつて？」

「あ。」と、友衛は微かに頷いて「それが怎うかしたのかい？」

「姉さんがそれを見て阿母さんに云つたものだから阿母さんは随分怒つてゐましたよ。」

「へえ。」と、友衛は呆れて秀治の顔を打目茂る。

「姉さんも、口惜いつて泣いてゐましたよ。」

友衛は益々驚いた。那樣事を聞いて怒つてゐるといふ叔母の心や、那樣事を告げて泣いてゐるといふ清子の心が、彼に取つては呆れるといふよりも、寧ろ滑稽に思はれたのである。

「左に右家へはいらうよ。」と、友衛は先に立つて、束々と裏口へ廻る後姿を、秀治は心配さうに見詰めながら尾いて行く。

「兄さん。大丈夫ですか。」

「何が？」と、友衛は勝手口の戸に手を掛ながら云ふ。

「はいると屹度叱られますよ。」

「しかし、戸外に何時までも立つて居られないぢやないか。」と、云ひながら戸を啓けて、身體を中へ入れた時、

「兄さん。」と、秀治は小聲で友衛を呼んだ。

呼ばれた聲は空耳かと思ひながら、友衛は一寸後を振りかへつて秀治を見たが、其まゝ急いで二階へ行つた。足許も見えぬ暗い、急な階段を、馴れた足どりで昇盡すと、五燭の電燈の薄明りが、微かに友衛の正面を射る。

其暗い電燈の下で、清子と差し向ひに成つて、何やら密々話してゐた叔母のお霜

は、友衛の上つてくる足音に驚いて、鋭く光つた其目を友衛の方に向けた。

「只今。」と、友衛は濡たタオルを鴨居の釘に掛け、石鹼箱を窓の隅の隅に置いて

二人の傍に進んだ。

「友衛。一寸此處へお坐り。」

徐かに云ふ言の中には刺がある。

「何か御用ですか。」

友衛は二人の傍に坐つた、不安そうな目付で二人の顔を見る。

「用と云へば用だがね。少しお前に聞きたい事があつて……」

「甚麽事ですか？」

「お前は甚麽心で家に居るのか、それを聞きたいのさ。」

「甚麽心では……」と、友衛は可厭な顔をした。

「たとへ親子兄弟の間でも、金錢は他人だと昔から云ひ傳へて有るけれど、妾は

お前の親から一厘半厘の食料も取らずにお前を置いて居るのだよ。又、お前の食料を請求してやつた事もなければ、お前を食客扱ひに爲た事も無いのだよ。妾はお前を家の者同様に扱つて居るのだが、お前は怎う思つてゐるか、その心持を聞きたいのさ。

「叔母さん。僕は叔父さんや叔母さんに對して、感謝こそして居ますけれど、不平に思つて居る事は少しも無いのです。」

「然うだらうとも。」と、お霜は大きく頷きながら「先日も云つた通り、妾は其事を恩に着せて云ふのぢや無いけれど、學校を卒業したら、不足だらうが此清と……」

皆まで云はせず友衛は、少々腹立氣味で

「ですから僕も承知してゐるぢやありませんか。」

「其言に偽は無いだらうね。」

「えゝ。」

「お前も立派な男なら、一時逃れやほんの座興ではあるまいね。」

「えゝ。」と、云ふ友衛の聲には力が無い。

「屹度だね。」

友衛は偶と顔を上げて

「叔母さん。」と、強く云ひ切り「それほど僕は信用の無い男ですか。」

「いゝえ。」と、お霜は慌て「然うぢやないけれど……」

「では何故然う諄く仰有のです？ 桐野友衛も男です。一時逃れや座興では、那

様、那樣立派な口は聞きません。」

友衛は腹立たしく云つた。

「まあ友衛。お前は怒つたのかい？」

「……」

『あゝして諄く云つたのは少し譯が有るからです。』

『その譯を伺ひませう。』

『妾もその事は云はねばなりません。友衛。』

お霜は甲走つた聲で其名を呼び『お前は今日誰と散歩をしてゐたのです。』

『え？』と、友衛は態度の變つてお霜の顔を見詰めて『僕一人でしてゐましたよ。』

『お隠しで無いよ。昔から人の云ふ通り、身を捨てこそ浮ぶ瀬もあれです。自分の身を助けやうと思ふなら、潔よく白状してお了ひなさい。』

大概かく成行くだらうと豫期してゐた友衛は、叔母の權幕が思つたよりも恐ろしいので今更ながら驚かざるを得なかつた。

『白状しろと仰有つても、知らぬ事は云へないぢやありませんか。』

『まあ。お前は何處まで白々しい事を云ふのだらうねえ。』

『でも知らない事は知らないと……』

『それ程お前が云はなければ、妾の方で云つて上やうか。お前は今日花枝さんと何をしてゐたのだえ。』

『一緒に歸つてきました。』

『まあ。』と、お霜は呆れたといふ顔付きで、友衛の顔を見目茂りながら『お前はよくも那樣白々しい事が云へたものだね。友衛！ お前は今一人で散歩してゐたと云つたね。』

『一人でしてゐたのですもの。私が散歩して歸らうとした時に、裁縫歸りの花枝さんに逢つたゞけです。』

『それに相違ないね。』

『相違ありません。』

『屹度だね。』と、お霜は駄目を押したが、急に先刻云つた事を思ひ出したので、慌て口を噤んで『けれど確に見たと云ふ人が……』

「ですから僕も一緒に散歩はしませんが、一緒に歸つて来たばかりだと、云つてゐるぢやありませんか。」

「けれど二人が巫山戯ながら來るのを見たと言ふ……」

「那樣事を誰が叔母さんに云つたのですか」と、友衛は清子を尻目にかけて「叔母さん！ 那樣事を叔母さんに告げた奴は大馬鹿者ですね。」

「……」

「人が女と歩いてゐるのを見て、嫉妬を焼くやうな奴は、どうせろくな奴ぢやないでせうねえ。」

お霜と清子は唯目と目を見合すのみで、頓には何の答へもなかつた。

「世の中には然ういふ馬鹿者を妻として、自分の一身を委ねる、意氣地のない男があると思へば、僕は……僕は其男の顔を見てやりたい。」

と、友衛は、顔に嘲笑の色を浮べつゝ、人を罵るが如く、また自分を罵るが

如く云ひ切れば、清子の顔色は颯と變つた

お霜は有繋に腹に据かねて、

「友衛！」と、居丈高に成り「お前は誰に向つて那樣事を云つてゐるんですか」

「僕ですか」と、友衛は、キョトンとする。

「當然さ。」

「僕は誰にも向つて云ひはしません。」

「然うすると、一人言を云つてゐたんだね。」

「まあ然うです。」と、友衛は冷笑しながら「僕が獨言を云つてゐるのを聞いて、叔母さんがむきに成つて怒る處を見ると……」

「え？」と、お霜は再び狼狽する。

「何が何だか、僕には少しも分らん。」

友衛は両手で頭の毛を掻き撚る。

此時階段の處から顔だけ出した秀治が、

「姉さん。手紙です。」

「然う。」と、清子は手を呻して、それをうけ取り、封書の表を一寸見て「友衛さん。貴方の處だわ。」

友衛が無言のまゝ、それを受取つて、懷中へ振込む容子を見てお霜は、

「お前は怎うしても花枝さんと怪しい關係は無いと云ふのだね？」

「無論です。」

「可し。」と、急に顔を和らげ「お前がそれ程云ふのだから、妾も疑を晴しませう。その代り……」

「その代り……」と、友衛は、叔母が此次に云ふべき言を、兢兢しながら待つ。

「其代り、此後、花枝さんとは一切口を聞かない事にして貰ひ度のさ。」

「え？」と、友衛は然ういふ難題を吹かける叔母の顔を少時見てゐたが「那樣無

理なことは……」

「能ないと云ふのかい。」

「えい。」

「それでは愈々白……」

「叔母さん。」と、友衛は底力の籠つた聲で云つた。

「何です？」

「僕は……僕はもう……花枝さんとは一切口を聞きません。」

「え？」と、お霜と清子は、有繋に驚愕の聲を上げた。

「まあ。」と、清子は詮方無しに口を切り「それは阿母さんの方が無理だわ。」

「清ちやん」と、友衛は清子の方へ向き直つて「義理や人情で那樣事は云つて貰ひ度く無い。如何に意氣地のない友衛でも、一旦聞かぬと云つた以上は、斷じて口は聞かないよ。」

■蚊やり
お霜と清子は又目と目と見合せて。
傍の火鉢に立てゝある蚊やり線香の煙りのみ、徐かに緩く輪を描きつゝ立昇る。

朧月夜

丈の低い、瘦せた身體ではあるが、骨組だけはガツシリした五五六の老人が、セルの單の身繕る軽く、表の硝子戸に手を掛けて啓けやうとした時、家の横手の曲り角に、思ひも寄らぬ女の立姿を認めたので、彼の老人は硝子戸から手を離し、雲間隠れの月の光で其姿を透し見て

「誰……」
「妾です。」と、低く答へる花枝の聲。

「あゝ、花枝さんかい？」
「えゝ。」
「俺は誰かと思つたよ。」と、腰に差した扇子を抜き取つて、忙しく風を送り「だが、今時分何故こんな處に立つてゐなさる？」
「え……妾？」と、花枝は狼狽て、妾……少し……。」
「少し用でも有つて……。」
「いゝえ。少し涼みに出たんです。」
「あゝ然うか。今晚は豪く蒸すからな。」
此老人が高聲で話す度に、花枝は一人ハラハラして、二階の人々に氣をかねるらしい。
「今晚はもう十一時だよ。……ごれ、俺もそろそろ寝ると爲やうか。」
「では、妾も寝すみませう。」

『寝た方が可いとも。ぢやお寝すみ。』

老人は再び家の前へ戻つて、ガタ／＼と音のする、滑りの悪い硝子戸を啓け、

『今歸つたよ。』

店へ上るなり一寸奥を覗き、

『秀治、お前一人か。』と、静かな語調で云ひながら、老人はズツと奥へ通り、火鉢の向方にドツカリ胡座を搔いて『お霜や清は怎うした。』

『二階で桐野の兄さんと話をしてゐるよ。』

『然うか。』と、老人は折角出した煙草入を、再び腰に差込んで、階段の上り口まで行つた時、

『阿父さん。』と、秀治が聲を掛けた。

『うむ。』と、老人は振かへりながら『何だ。』

『二階へ行かない方が可いよ。』

『何故？』

『……………』

秀治の答がないので老人は、徐かに頷きながら、

『ふゝむ。又やつてるな。』と、小聲で云ひつゝ上つて行く。

此老人は池島喜一郎と云つて、友衛の爲には義理の叔父に當るのだ。若いうちに此道の腕利として、同業者の間にも可成其名を賣つて居たが、取る年には勝れず若い時のやうに仕事も思ふ如く行かぬので、今では其株を長男の祥太郎に譲り、自分眞の遊び仕事に注文取りをして歩いてゐるのであつた。

軽い馴れた足ざりで、静かに階段を昇り切つた喜一郎は、三人の傍へ来てドツカリ胡座を搔き、

『おい、今歸つたよ。』

『お歸りなさい。』と、三人は一樣に頭をさげる。

『何か面白い話でも有るのか。』

『いゝえ。別に……』と、お霜は逡巡して『御飯は何處かで……』

『あゝ。歸りがけに蕎麥を一杯食つてきた。』と、喜一郎はお霜を始め二人の顔をジロジロ見てゐたが、急に大聲上げて笑ひ出したので、三人は驚愕して喜一郎の顔を見る。

『何が可笑しいのです？』と、お霜は有聲に聞き答める。

『何が可笑しいつて……お前たちの顔は何てえ顔だ。まるで苦虫を嚙潰したやうな面をしてやがるぢやねえか。』

『まあ。』と、云つたがり、お霜も清子も後が繼げなかつた。

『おいお霜。時には笑つた顔も見せねえな。年百年中苦え顔ばかりしてゐねえで近頃、お前が友衛を見る眼色が違つてるせ。』

『何ですつて？』と、お霜は喜一郎の方へ向き直る。

是を手を上げて制した喜一郎は、言靜かに『まあ良く聞きねえつて事。』と、云ひながら眞鍮の煙管で慌て煙草を吸んで

『お霜、お前と友衛とは親身の叔母甥ぢやねえか。其親身の甥に對して、食客扱かひ出て行けがしにするさへあるに……。』

『お前さん。』と、居丈高に成り『何時妾が友衛を食客扱かひにしましたか、いゝえさ、何時出て行けがしにしましよ。それは親から預つてゐる友衛ですもの、なまくらにしては是の親に對して濟まないと思ふから、つい、苦い顔も爲ませう。また、面白くない事も云つて叱りませう。けれど……』

後の云ふべき言に詰つて口籠るのを、喜一郎は冷やかに一瞥して、『お霜。お前が然うして一匹一人前に怒つたり理窟を云つたりする處を見ると、是でも少しは血の通つてる人間と見えらあ。』

飽まで相手をして怒らしめねば止まぬといふやうな態度が、其云ふ言の節々に現はれてくる。——否、節々に現はれてくると云ふよりも、寧ろ其云ふ言全體の中に現はれてゐるのだ。

お霜は一寸清子の顔を盗み見て、吃と唇を噛んだが、頓には何とも言が出なかつた。友衛は始めから俯き勝で、只時々苦笑を洩らすのみで、一言半句の言も口へは出さぬ。

喜一郎は、友衛と清子を尻目に掛けた後、徐かに其目をお霜の顔に移して、

『俺は恚ういふ無學な人間だから、六ヶ敷ことは知らねえが、是でも人情の甚麼ものか位は知つてゐる。』

『へえ。お前さんが？』と、お霜は呆れた顔をして喜一郎を見る。

『然當よ。お前のやうに血も涙も無え人間とは違うんだ。』

『何ですつて？』と、お霜の容子は再び變つた。

『馬鹿大概にして止さねえか。』

『止しませんよ。』

『止さなければ俺は飽まで友衛に加勢する。』

喜一郎は恚う云つて友衛の姿を盗み見る。恚うして喜一郎が、友衛に加勢してお霜と云ひ争ふところを見ると、大いに友衛の身の上同情を寄せてゐるやうではあるが、その實決して然うではなかつた。時には、お霜以上に彼を虐待することもあつた。もと／＼、友衛と清子を一緒に爲やうといふ案は、此喜一郎の口から出たのである。が、近頃、清子の我儘が日に日に募つて行くのを飽足らす思つてゐる折から、お霜が友衛を虐待することが急に激しく成つたので、一つはお霜や清子へ面當に、友衛に加勢して見せるのであつた。

此のやうな有様で、お霜と清子は甚だ面白く無かつた。分て清子の如きは

『阿父さんは、友衛さんばかり最負してゐるんだ。』と、不平さへ時々洩らした。

けれど、友衛の身に取つては、此喜一郎の待遇を敢て嬉しいとも思はず、却つて有難迷惑に思つてゐたのだ。

『阿父さんは、其譯も知らない癖に那樣事を仰有のね。』

清子は、ついに耐え切れなく成つて、母親の顔を覗き込んで云つた。思はぬ救ひを得たお霜は、忽ち勇氣恢復して、

『然うともさ。其譯も委しく知らないで、友衛にばかり肩を持つてゐる……。』

『譯？、へん、篋棒め。譯なんか聞かなくても大概分つてら。』と、喜一郎は口積なく罵り返す。

『分つてゐたら此處で云つて御覽なさい。』

『極つてらあ。また友衛がおそく歸つたとか早く歸つたとかで……』

『違ひますよ。』と、清子が怒鳴る。

『怎う違ふ。』

『那樣生優しい事ぢやありませんよ。』

『ぢや甚麼事だ。』と、喜一郎は徐かに煙管を口の傍へ持つて行きながら『怎うした早く云はねえかよ。』

かういふ羽目に成つてみると、お霜は却つて元氣がついた。そして今日友衛が花枝と歩いてゐるのを清子が見たといふ處から、自分が今まで友衛を聞き糺してゐた事など、總ての事情を具さに物語つた。

最初は多少の疑念を抱いて聽いてゐた喜一郎は、お霜の輪をかけて話す熱辯に知らず識らず引き入れられて、煙草も吸まずに聞いてゐたが、密かに思ひ知られる事もあつたので、強い感動を其受答の語に現はしてゐたが、お霜が語り終ると共に

『うむ。成程な。然うだつたか。』と、始めのやうな勢は少しも無い。是に反してお霜は、ますます、勢激しく爲つて

『さあ怎うです。是でも妾が友衛を咎めるのは不可ないでせうか。』

『まあ待てよ。……だが……だが』

『だが、怎うしたんです。』

『二人で歩いてゐる處を見た、けでは、直ぐ然う極める譯に……』

『だから、友衛と花枝さんが巫山戯ながら歩いてゐるのを見たといふ人が有るぢやありませんか。』

『けれど、本人が……。』

『誰か、自分でした事を、私は今日は々の女と巫山戯ながら歩いてゐました。なんて云ふ奴があるのですか。』

『それも然うだな。然う云はれて見ると、俺も思ひ當る事が有るよ。』

『甚麽事です？』

お霜は膝を揺り出す。

『今歸つてきた時、家へはいらうとすると、家の角に花枝さんか立つてゐるんだ』

で、何をしてゐるんだと聞いたら、餘り景いから涼みに出てゐるのだ。と恚う云ふんだ。俺も其時は然うかと云つてゐたが、今お前だから其話を聞いて思ひ出したが、其時花枝さんは一寸一寸二階を見てゐたよ。』

『そら御覽なさい。那樣にいゝ証據が有るぢやありませんか。』

『是は友衛、お前の方が良くねえぞ。』

『叔父さん。』と、友衛は突然口を開いて『たとへ、花枝さんが二階を見てゐたにしろ、僕には何の疚しい處はないのです。』

『うむ。成程。』

『また、僕が花枝さんと歩いてゐた處や、花枝さんが二階を見て居た位で、即座に斷定を下すのは、餘り早計ぢやありませんか。』

『お霜の方に云ひ分が有れば、友衛の方にも相當の理窟がある。だが、友衛と花枝さんが怪しい關係が有る無いは畢竟是は水かけ論だからね。友衛！ お前も一』

つ証據を見せておいたら怎うだね。」

『え、』と、友衛は競々しながら『どうすれば可いのですか。』

『やはりお霜の云ふ通り、當分花枝さんと口を聞かない事さ。』

『ですから僕は始めから承知をしてゐるぢやありませんか。』

『然う早く話が極ればそれで可いぢやねえか。……なあ。お霜。注意してえ事が有るなら、今晚はおそいから明朝にしな。え、おい。』

『然うしませうよ。』と、清子の方を一寸見ながら『さあ、清。下へ行こう。』

『え、』と、清子とお霜は連れ立って下へ行つた。後見送つて喜一郎は『ふ、ん』

と、鼻で笑ひながら『友衛。お前も、もう寝なよ。』と、云ふ言を後に残して下へ行く。

一人後に残された友衛は、やをら立上り、雨戸を繰るべく窓の處へ行つた時、下から突然、

『友衛さん。』と、小聲ながら力の籠つた聲が聞える。友衛は、聲する方を屹と見下せば、下には悄悄として佇む花枝の姿が其目に映つた。

『あ、花枝さん。』と、其名を呼んだ彼の目には露の如き涙が宿る。

『花枝さん。話したい事は譯山あるが、それは明日の朝に爲やう。』

『……』

聳てる耳に答は無くて、微かに聞える啜泣きの聲。

『花枝さん。明日の朝十時頃日除の原で逢つてくれないか。』

『逢ひませう。』

『十時だよ。』

『え、屹度よ。』

と、云ふ言さへ込上る涙の爲に妨げられて、思ふたよりも貧弱な聲で云ふ。『ではお寝すみなさい。』と、目界も見えぬ中より、花枝は苦し氣な息を吐きなが

ら云つた。

■ 朧 月 夜

四十二

『あゝ。』と、友衛は、次第に消行く花枝の後姿を見送つてゐたが、俄かに下で清子の兄の祥太郎の音太き聲が聞えるので、彼ははつとして首を縮めた。

ち
か
道

待遠しいやうな、悲しいやうな其夜は明けた。友衛が寄宿してゐる池島の家、真裏にあたる海老原の家では、昨晚遅く友衛と一言二言話をして歸つた花枝は、一夜まんじりとも爲ずに其朝を迎へたのである。

表通りに牛乳屋の箱車がとゞろく響き、續いて横道へはいつてくる納豆屋の呼聲が聞えると、花枝はもう床の中に凝乎としてゐられず、急いで床から離れ、寝衣姿

咲りへか

のまゝ、雨戸を一枚そつと啓けた、未だ露の濃い小庭の中に咲き競ふばらの花を凝平と見詰めた。

『まあ好い氣持だ事。』

と、獨言つゝ、彼女は、徐かに庭に降りて、先づ手近な、花のついたばらの一枝を手折、靜かに鼻の處へ持つて行きながら、再び家の中へはいつた。而して、再び雨戸を閉めやうとした時、

『花枝。』と、言徐かに呼んだのは、花枝の兄の常正である。

『あゝ、兄さん。』と、花枝は、手に持つたばらの一枝を、見付からぬやうに後へ廻すのを早くも見付けた常正は

『また折つてきたのか。』

『餘り好い花でしたから……。』

『いつも好い花だからつて、然う無暗に折られては、木もたまらないだらうが買

咲りへか

■ ち
か
道

四十三

つてきた僕の方が猶つまらないや。
と、云ひつゝ、微笑む常正の顔を、凝乎と見てゐた彼女は、急にうら淋しい顔をし

た、
『兄さん。御免なさいね。妾、知らず識らず……。』

『無意識に折つて了つたのかい？』

『然うなんですよ。』

『まるで子供のやうだな。』と、云ひながら、花枝の肩に手を掛けて、俯むいてゐる彼女の顔を覗き込んだ常正は、忽ち顔を曇らせて、

『花枝！ お前は怎うかしたのかい？』

『いゝえ。』と、花枝は慌て打消たが、昨晩表外に居て、——始めからの事はよく分らなかつたけれど、友衛とお霜の間答を聞き、その上お霜が提出した難題を、友衛は無理な事だと知りつゝ、受けた、其心の中を察して、彼女は知らず識らず戻ぐじ

だ。

『それなら可いけれど、僕はまた何處か悪いんぢやないかと思つて……。』

『兄さん！』

『え？』

『妾の容子が然う見えて？』

『見えたから聞いたのだ。』

『然う。』と、僅かに口の中ので云つた花枝は、涙の湧出る雨の眼を、寝衣の袖で押へた。

『おや！ お前は泣いてゐるね。』

餘り大きな聲で云つた常正は、思はずハツと首を縮めて、奥の方の様子を伺がつた後、急に低い聲で、

『おい！ 怎うしたんだ。』

■ちか道

「泣くやうな悲しい事が有つたら云つて御覽、事と場合によつたら此兄が力に成つてやる。」

「……。」

「え、おい。怎うしたのだ。」

花枝は、少時歎歎てゐたが、此時偶と顔を上げて、

「妾、何にも悲しい事は無いのですけれど……。」

「では、口惜しい事でも有るのかい？」

「いゝえ。」

「分らないねえ。では、何で泣くんだ。」

「妾にも分りませんわ。」

「へえ。」と、常正は呆れて妹の顔を見目茂りつゝ、

■ちか道

「では、神経衰弱かな。」

「然うかも知れませんがね。時々恚うして泣きたく成つてくるのですもの。」

「ちや、愈々然うだな。」

花枝は偶と今日、友衛と逢ふ約束がしてある事を思ひ出した。

「兄さん。妾、もう御飯の仕度をしなければなりませんから、兄さんは雨戸を啓

けて下さいな。ね？ 頼んでよ。」

と、彼女は慌て眼を押拭つて、勝手の方へ行く。

それから二時間餘り過ぎた後、一家四人打揃つて朝餉を済した後で、花枝は臺所を片附るのも心急ぎ、思つたよりもはか／＼しく行かぬので、一人齒痒がりながら左に右片附終せて、急いで戸外に立出て見れば、晴行く霞の薄れより、今日も酷しい日は耀やいたが、軽く面を吹く微風にも、門の松ヶ枝より滴る露にも、まだ幾分の涼味は見える。

前の池島の家では時々甲走つた清子の聲が聞えるのみで、自分が聞かうと思ふ友衛の聲は少しも聞えぬ。

『もう出掛けたのか知ら？』と、花枝は口の中で呟やいたが、それでも其處を立去らうともせず、猶一心に耳を傾けて友衛の聲を聞きとらうとして居るのだ。

此の時表通りから束々とはいつてきた十六七の少女は、花枝の姿を見るより嫣然り笑つて、

『海老原さん。貴女、まだ被在らないの？』

セルの單物の形よく着こなし、結立の銀杏返しは細面の顔によく似合、首の細い處が特に目立つ。

『まあ關根さん、今日大層早いのね。お天氣が變らなければ可いけれど……。』
『あら！』と、少女は愛くるしい目で花枝を睨み『もう何時だと思つて？ 九時になつてよ。』

『もう那樣になつて？ では妾も行きますから少し待つて、頂戴。』と、花枝は云ひ捨て、家の中に駈込んだ。

此少女は關根滋子と云つて、花枝と同じく裁縫を習ひに行つてゐる者で、數ある弟子の中で花枝と共に並び稱されてゐる程、美しい少女である。

少時待つ程も無く綺麗に化粧をほごした花枝は、左手に風呂敷包をかへ、右手に日傘を持つて現はれた。

『どうもお待遠さま。』

『いゝえ。』と、云つた滋子は、何時もながら美しい花枝の姿に見惚れてゐた。

『關根さん。今日は近道を通つて行きませうねえ。』

『えゝ。』と、滋子は心よく返事をしたが、急に思ひ出したやうに顔を曇めて『だげど、道が悪いわねえ。』

『その位の事は辛棒なさいよ。一長一短とか云つて可い事があれば又何處かに悪

「い事があるものよ。」

「貴女もお兄様のお仕込だけ有つて、大層六ヶ敷事を仰有いますのね。」

二人は顔見合せて嫣然り笑ひながら、花枝の云つた近道——海老原の家の横手から、新町の電車通りに通する細道——を樂し氣に話しながら行く。

「貴方が其着物を着て被在ると怎うしても十七となんか見えやしないわ。」

花枝は何時もしみじみな物ばかりを好む滋子の容子を見て云つた。

「では幾歳位ひに見える事？」

「然うねえ。……怎う見たつて妾と同一年位に見えてよ。」

「然う？」と、滋子は嬉しさうな顔をして『ほんとに其位に見えると可いけれど……』

「ほんとに然う見えますよ。」

それには答へず滋子は、何やら物思ひに沈んでゐたが、少時して偶と顔を上げて

「ねえ。海老原さん……」

「何です？ 急に改たまつて。」

「妾、早く歳を取りたいわ。」

「え？」と、花枝は有繋に驚いて目を睜る。

「妾、どんく歳を取つたら可いだらうと思ふのよ。」

「まあ。」と、花枝は驚くよりも寧ろ呆れて滋子の顔を見詰めたが、急に莞爾に笑つて、

「那樣にどんく歳を取つたら世の中の人皆、お爺さんとお婆さんに成つて了うわ。」

「それは然うですけれど……歳が若いと怎うしても人に馬鹿にされるわ。」

「……。」

花枝は答へなかつた。

「ですから、せめて貴女位ひに早くなりたいと思ふの。」

「貴女は今日、餘程怎うかしてゐるわね。」

「何故？」

「でも、何時もこんな事を云つた事のない貴女ですもの。」

「妾、今日口惜しくて詮方が無いのよ。」

「怎うして？」

「今朝出てくる時に阿母さんがまだ單物も満足に縫ないなんて云ふのですもの。」

「それは詮方が無いわ。」

「ですから、早く歳を取たいと云ふのよ。」

二人がこんな會話を取交しながら、今しも新町の電車通りへ出やうとした時、笹塚行の電車から降りた一人の男、銘仙の單物に縞の夏羽織の身繕もいと輕げに、束

々と二人の傍に駆寄つたので、二人は思はず身を退いた。

「一寸伺ひます。」

と、云はれて二人は逃腰に成つたまゝ、

「はい。」

「此邊に池島といふ家は有りませんか。」

「池島……何といふのでございます。」と、花枝は反問する。

「確か、……祥……太郎といひました。」

「あゝ、然うですか。」と、花枝は今出た細道を指さして「それなら、此の細い道を真直ぐ被在いますと、向方の通りに入るやうになつてゐます其角の家が然うでございませう。」

「然うですか。どうも有難う。」

「唧筒屋ですから直ぐ解ります。」

「どうも有難う。」

と、禮を云つて行く男の後姿を、花枝は氣に成るかして凝乎と見送つてゐるとそれまで黙つてゐた滋子が不意に肩に手を掛けて、

「海老原さん。何をしてゐるの？」

「え！」と、花枝は振かへり「何有？」

「別に何でもないのでよ。早く行きませうよ。」

「えい。」と、領きながら歩み出しつゝ、

「あの人は何だらう。」と、獨言を云ふやうに呟やいた。

舊友

池島の二階で着物を着かへてゐる友衛の處へ今しも清子が一枚の名刺を持つては

いつて来た。

「お客様よ。」

「どれ。」と、清子から其名刺を受取つて見れば「中澤兼一」と、書いてある。これを見た友衛の顔は、意外らして目を睜つて

「中澤君が来たのか。直ぐ通しておくれ。」

清子は領いて下へ降りて居つたが、直ぐ階段を昇る軽い足音がして、清子は先に

中澤兼一は入つてきた。

「どうぞ。」と、清子は二間の境に成つてゐる襖を啓けて云つた。

「大きに……。」と、云つて中澤が中へ入るより早く「やあ、久しぶりだねえ。」

「可うこそ。」と、友衛は座蒲團を出してすゝめ「暫らくでした。」

清子は二人が挨拶する處を見てゐたが、急に氣付いたやうに

「友衛さん。此處を啓けておきませうか。其の方が却つて涼しくて可いでせう。」

『あ、よく啓けておいてくれ。』と、友衛は素氣なく云つて直ぐ此方へ向直り、

『何時向方をお立でした？』

『一昨日の朝一番で立つたよ。途中一寸名古屋へ寄つてきたから此方へ着いたのは今朝だった。』と、中澤は部屋の中をぐるりと見廻して『何處かへ出掛ける處だったのかい。』

『一寸其處まで行こうと思つてゐたのですけれど……何有、後で可いのですよ。』此の時清子が茶を持って入つてきて、無言のまゝ二人の前へ置いて去つた。其の後姿を見送つてゐた中澤は、急に思ひ出したやうに傍の小さな風呂敷包を引き寄せて、

『すつかり忘れてゐた。』と、中から小さく疊んだ紙を出して『これは君の阿母さんから依頼されたものだ。』

『然うですか。』と、中澤の目の前で其の紙を開いて見れば、中から五圓札が四枚

現はれたので、友衛は少なからず驚いた。其容子を見て中澤兼一は倍こそと領きつ一段聲を低くして、

『それはね。君が此度他の學校へ入るのに就て、少しは金があるだらうと思ふから僕に持つて行つてくれと云はれたのだ。』

『……』

何にも云はず其金と、中澤の顔を見詰めてゐた友衛の目には涙が耀いた。

『子を思ふ親心は總て其通りだ。況して遠く我が子を學問させに出しておく君の阿母さんの心は實に一通りならぬ苦勞をしておられるのだぞ。其の心を察しても君は大いに勉強をして、一日も早く親に安心させなければ不可んよ。』

『無論！ 中澤さん。僕は大きにやります。』

『勿論然うあるべきだ。其二十圓の金を得るにも阿母さんほどの位苦勞されたか知れないよ。口でこそ二十圓だが、君に取つては一万圓二万圓の金よりも、猶尊

「……。」

友衛は何とも云はず俯むいて了つた。

「君と僕とは幼ない時から兄弟の如くにして育つた間柄だ。而かも、君は兩身有つて僕に兩親は無い。君の兩親には幼ない時から、口で云はれぬ程お世話になつたのだから、これから後は子として君と共に、御恩返しをしようと云つて出てきたのだ。其時に君の阿父さんや阿母さんは泣いてお喜びなすつた。而して君の身の上も、くれぐれと僕にお頼みなすつたから、僕は、よろしい弟と思つて君の身体は引受ましたと云つたら、それが嬉しいと云つて又お泣きなさるではないか。」

友衛は物も得云はず、唯嬉し泣きに泣くのみであつた。

「其時の有様が今目の前に見えるやうで、僕は涙がこぼれる。」

恚う云ひ切つた中澤兼一の目には、熱い涙が宿つてゐる。それを手の甲で拂つて

「君も大いに勉強してくれ。僕も多少世の中に知られた青年畫家だ。これから又書こうと思つてゐる。」

「では、もう京都へは歸らないのですか。」

「時々歸るよ。」と、帯の間から時計を出して見て「だが桐野。友達に氣を注げるよ。友の善悪如何によつて、君の運命は定まるのだからな。それから酒は一滴たりとも飲まぬやうにし、女に目をくれるな。物事をよく考へ、慎重は態度で何物にも當れ。」

「……。」

「久し振で逢つたのに、可厭な事ばかり聞かせて濟まなかつた。」

中澤は恚う云つて冷たく成つた茶を一息に飲み干して

「左に右勉強するさ。」

「で？ 國元では皆無事ですか。」

友衛は先刻から聞こう聞こうと思つて居ただけれど、中澤の言に妨げられて云ひ得ずしてゐたが、中澤の言が切れると同時に早速云ひ出した。

「僕は其事が何よりも氣に懸るんです。」

「あ！ すつかり忘れてゐた。」と、中澤は頭を掻き「最も大切な事を忘却するとは、中澤兼一も少し老碌をしたかな。」

「別に變りはないのですか。」と、友衛は無暗に先を急ぐ。

「處が有るんだよ。」

「え？」

友衛は急に頭を鐵鎚で打たれた如き息苦しさを感じた。

「君の阿父さんは二十日ばかり前から感冒の心地で寐て居られる。が、大した事は無いから安心したまへ。」

「親父が悪いのですか。親父が……」

二十日ばかり前からだと云ふと、二三度の音信は有つたが、其都度、皆無事だとのみ書いて有つて、父親が病氣だと書いてきた手紙は一つも無い。友衛に取つては蓋しこれが初耳で有つたのだ。

たとへ父親の病氣が軽いにもせよ。何故母親は是を知らさなかつたのだらう？

自分はそのだけ親たちから疎んじられて居るのだらうか。なご、云ふ不平さへも、心が静まると同時に起つてきた。

「阿母さんも餘り酷い。」

友衛は迂濶吐いたのを、早くも聞きつけた中澤は

「桐野！ 決して阿母さんを怨んぢや不可んぞ。阿母さんが君の處へ知らせないのも、君の阿父さんの意から出たのだ。」

「え？」と、友衛は再び目を睜る。

「これしきの病氣を、友衛の處へ云つてやつて、友衛の勉強の妨げに成つては不

可んと、君の阿父さんが云つて居られるのだから、阿母さんも阿父さんの意に反對してまで、君の處へそれを云つて寄す事は能ないのだ。君も御兩親の意を諒とし、御兩親に對して感謝しても怨んぢや成らないぞ。』

恚う云はれても友衛は何となく物足りない感じがした。けれども、これ程兩親が自分の事を思つてゐてくれるのかと思ふと、友衛は兩親に對して心底から感謝した

「昔からの譬にも焼野の雉子夜の龜とか云ひまして、子を持つ鶴は夜も猶、碌に寐もやらず我子を守ると云ひます。鳥でさへも子の爲には其位の苦勞はします。況して人の親は其子の爲にどの位苦勞をするか分りません。其を思つて私は始めて兩親に感謝すると共に、陰ながら力を添て下さる貴方にも感謝するのです。』

『おう。』と、中澤は嬉しさうに『其事を永久に忘れるな。』
『忘れやしません。』

此時機の上の目覺し時計が、徐かに十時を報じた。友衛はそれに冷やかな一瞥を

くれると共に、急に何やら思ひ出したらしく、はつと首を縮めて、

『中澤さん。』と、云ふ言さへ弱々しく『世の中には、心の許さぬ女の爲に、一生不幸に終る意氣地の無い、馬鹿な男も有りますねえ。』

『然うども。世の劣敗者は皆女と酒の爲だ。』

中澤は友衛の心を計り兼、其意味を取違へてゐるらしい。

『しかし、然ういふ意氣地の無い馬鹿な男にも蔭ながら力を添てくれる女も有ります。』

『然うかなあ。那樣奇特な女も有るのかなあ!』

友衛は始めて中澤が其意味を取違へてゐる事を知つたが、それを云ひ直さうともせず、苦笑して俯むいて了つた。

『飛んだ長居をして濟まなかつた。』と、中澤は立上り『今日は是で失敬する。君も少と遊びに來たまへ。』

友

「お住居は？」

「元居た下宿屋だ。」

「然うですか。其中に是非伺ひます。」

「諄く云ふやうだか勉強しろよ。」

「……。」

友衛は衝と立上り

「中澤さん。其處まで一緒に行きませう。」

「君も出掛けるんだつたな。」

友衛は徐かに帯を締直した。

ちかひ

「花枝さん。すいぶん待つたらう？」

今しも中澤兼一と表通りで別れ、約束の十時より少し遅れて、日除の原へ駈付けた友衛は、忙しく息を刻みつゝ、憊う云つて花枝の顔を覗込んだ。

「え、一時間ばかり待ちましたわ。」と、花枝は俯むいた。

花枝も滋子と一緒に此處まで来たが、友衛と逢ふ約束がしてあつたので、口實を設けて滋子と別れ、先刻から此處へ来て待つてゐたのだ。

「済まないねえ。久しく逢はなかつた友人が尋ねて来たものだから……。」と、友衛は眞實氣の毒さうな顔をして、辯解らしく云ふ。

■ちかひ

「其お友だちと云ふ方も知つてゐるわ。」

「え？」と、友衛は有聲に驚いて「其友を知つてる？」

「え、知つてるわ。二十四五の、色の赤い、良く肥つた人でせう。」

「良く知つてるねえ。」と、友衛は目を睨り「怎うして知つてゐるの……。」

「先刻其人が貴方の處を聞いたのですの。」

「へえ。」と、友衛は猶、解しかねる面色。

「家の横から新町へ出る角の處で其人に逢つたのよ。」

「然うか。」と友衛は始めて分つたやうな顔をした。

二人の間には可也長い沈黙が続いた。少時して友衛は、

「花枝さん。」と、重々しい調子で口を切り「二人は一年半の友達だつたねえ。」

「……。」

「思へば長いやうで短かい物だつた。」

■ちかひ

「……。」

花枝はホロリとした。友衛は横を向ひて、一寸涙を拂ひ、

「二人が再び口を開くやうに成るのは何時の事やら……。」

花枝は此時偶と顔を上げて、

「何故？ 何故なのよう？」と、云ふ聲さへも打顫ふ。

「話せば長い事だが、話さなければ分らないから話さう。」と、衛は口中へたま

つた唾をぐつと吞込んで「昨日君と一緒に歸つたのが抑も君と再び話す事の能

く成つた原因なのさ。」

「其爲にあらぬ疑を掛けられて、妾と二度と口を開いては不可ないと云はれたの

でせう。」

「其通り。」

「其事は昨晚戸外で微かに聞いて知つてゐます。」

『ふうむ。』と、友衛は長い溜息を發と吐いて『無理な事とは知りながら、僕も其事を承知したんだ。』

『……。』花枝は聲を忍ばせて泣いた。

『承知しなければ其疑を晴らす事は出来ないのだもの。』

『……。』

花枝は少時歎歎てゐたが、偶と顔を擡げ、涙の満た眼を友衛に向けて、

『では、二人は是限、話をする事が出来ないのですね。』と、身を顫はす。

『僕も叔母の前であんな立派な口を聞いたんだから……。』

『だけど……。』と、花枝は目界も見えぬ中より、息も苦しげに云つた『ねえ。友衛さん……早く勉強なすつて下さいね。貴方が一本立になれば、誰にはゝかる處もなく話をする事が能るんですから……。妾は……妾はそればかりを楽しみにして何年でも待つてゐますわ。』

『でも、花枝さん、君の身体は……。』

『いゝえ。妾の身体などは、怎うなつても構はないのです。只、妾は貴方が一本立に成るのを待つてゐるんです。』

恚う云つた花枝の言は、彼女は誠心から出た言であつたのだ。

是より先、友衛が京都の或中學校から、東京の或中學校に轉じて來た時の其姿が花枝の目には如何にも田舎者らしく、貧弱に見えたのである。否、彼女の目には貧弱と云ふよりも、寧ろ滑稽に見えたのである。しかし花枝が清子の紹介に依つて友衛と交りをつんで見ると、自分の思つたやうな貧弱な者では無くて、淡白な男らしき男で有つた。一見したところ、愛嬌に乏しい相をしてゐるが、一度交際つて見れば、決して愛嬌に乏しい男では無く、人交際も可い男であつたのだ。分て、屹と引緊つた面貌には、有紫の花枝も少なからず心を引入られた。搦て加へて、時折友衛の身の上話を聞いて、大いに其身の上に同情を寄せて居たので有つたが、日を経

るに従つて、友衛に對する同情心が戀に變つてきたのである。けれど、娘心にそれも明らさまに云ひ兼て、今日まで過して來たのだが、今の如き成行に成つたは、彼女は明らさまに自分の心を友衛に知らしめたのであつた。

友衛にしては、是程花枝が自分の爲を思つて居てくれたとは、今まで思ひ設けぬ事であつたので、少時花枝の顔を、感謝に満た目で見て居たが、露を含んで彼女の目には、強い諦めの色が耀いてゐるので、彼は得も云はれぬ悲しみの幕に包まれ、少時俯むいて涙を呑んでゐたが、偶と顔を上げると同時に、矢庭に花枝の手を取つて固く握り緊め、

『花枝さん……』

『え?』と、花枝は驚ろきの聲を揚ながら、取られた手を振離さうともせず、凝乎と友衛の顔を見詰めた。

友衛は多少激したのか、青白い顔は赤味を帯び、

『君は……君はこんな意氣地の無い男でも、それほど思つてゐてくれたのか。』

『……』

せきくる涙に答は無くて、花枝は僅かに頷いた。

『花枝さん。僕は感謝する。心から感謝するよ。叔父叔母が何と云はうよも、二人はやはり以前の如く……』

『でも又、叔母さんに知られると、貴方が惑迷なさるでせう。』

『何有構はん。僕は世の中の者が悉く敵でも、君一人味方なら、それで満足なんだ。』

『ほんとう?』

『うむ!』

『……』

花枝は物も得云はず、唯、嬉し泣の聲を揚た。』

二人の間に少時沈黙が續くと、友衛は此の原へ来た時のやうな、冷靜な心に成り得た。と、同時に、自分の事ばかり思つて、花枝の身の上に考へを及ぼさなかつた悔が、續々と心に起つてくる。

『しかし、花枝さん。こんな事が君の御両親に知れたら君が迷惑するだらう。』
『いゝえ。迷惑位ひは構ひはしませんわ。先刻から云つてる通り、妾の身体などは怎うなつても構はないのです。』

『だが、近い中に君はお嫁に行くといふ話だが……。』

『偽！ 偽よ。』

『でも、然ういふ話が有つたんだもの。』

『然ういふ事も有りましたけれど、斷はつて了つたんです。』

『ふうむ。』と、友衛は疑ぐり深い目で花枝の顔を見る

『妾、お嫁になご行きやしないわ。』

『屹度？』

『えゝ。』と、花枝は含羞みつゝ、俯むきながら僅かに聞得る小聲で、

『其代り貴方もね。』

『あゝ。』

『約束してよ。』

『誓つた。』

二人が固く握り合せた其手には、熱し切つた血が通じて、二人の胸に流れ込んだ少時して固く握つた手を離れた友衛は、懷中から一通の手紙を出して

『花枝さん。愈々國から返事が来たよ。』

『あら！ 然う？』と、花枝は急に晴やかな笑顔をつくつて『で、？ 何と云つて？』

『万事好都合さ。』

「では、學校の方さへ良く行けば可いのね。」

「其方も大丈夫だらうと思ふんだ今日これから行つて手續をして來やうと思ふ。」

「それが可いわ。一時も早い方がね。」と、花枝は上目使ひに彼の顔を見上げ「學

校へはいつたら一生懸命に勉強して下さいな。」

「うむ。」と、友衛は微笑む。

此時、原を横切る細道を、稍急ぎ足で來かゝつた滋子は、遙かに二人が睦まし氣

に話をしてゐる容子を見て、一寸立止つたが、又思ひ出したやうに小走りに走つて

二人の間近に駆寄り、

「海老原さん。」

呼ばれた聲は空耳かと思ひながら見返れば、滋子はもう二人の傍に來てゐた。

「あら！ 關根さん。」

花枝が恥かしそうに忸怩してゐた容子を、滋子は可笑さを耐えて見てゐたが、傍

に友衛が立つてゐるのに氣が注いで無言のまま、僅かに腰を曲た。

友衛も僅かに頭を下げたが手持無沙汰の体で十間ばかり彼方に、遊び戯むれてゐ

る三四人の子供を見てゐる。

「貴母は未だ被在らないの。」と、滋子は微笑ながら云ふ。

「今行こうと思つてゐたんですよ。」

「先刻から貴女のお荷物が待つてゐますよ。」と、滋子は笑ふ。

「貴女は何處へ？」と、花枝は滋子の顔を見つめる

「糸を買ひに來たんです。」

「では、早く行つて被在な。それまで妾は此處に待つてますから……。」

「では、行つて來るわ。」と、滋子は、友衛に目禮して、通りの方へ急ぐ。後見送

つてゐた友衛は、一寸花枝の方を振り返り、

「花枝さん。君は今日行くんだつたねえ。」

「えい。」

「僕は、君が何も持つてゐなかつたから、今日は休むんだらうと思つてゐた。」

「先刻彼人に先へ持つて行つて貰つたんですの。」

友衛は頷きながら、一寸汗ばんだ顔を拭いて、

「隙を取らせて済まなかつたね。」

「いゝえ、可いのよ。」と、花枝は慌て「どうせ今日の中に能上る物ですから。」

「では、僕もこれから行つて来やう。」と、獨言を云ふやうに云ふ。

「早く安心させて下さいよ。」と、花枝は笑ひながら云つた。

友衛は無愛相な顔をして「では、行つて来やう。」

暑さ盛り

友衛と花枝が睦まし氣に話をしてゐたのを清子が見出して、これを兩親に告げてからは、喜一郎お霜の夫婦は、細心の注意を拂いつゝ、こゝに一月餘りは過ぎて了つた。

友衛が入學を志した東京工科學校の手續も都合良く運び、先月より通ひ始めたが餘りに叔父叔母の冷酷なる呵責に堪へかねて、多少自棄氣味になつてゐる矢先、工科學校へ入學してから交りをつなぐ、長谷川吉藏、山川有伸の二人が網を張つて待つてゐる其網に懸り、つい墮落の淵に足を踏滑らし、追々深みへ沈んで行くのであつたが、一度道に踏迷つた彼にはそれが分らなかつた。

一犬形を吠ゆれば百犬聲に吠ゆとか——衛が追々墮落の淵に沈んで行く其幾分かの事實を捕へた喜一郎お霜の夫婦は、忽ちそれに輪を掛けて、近所の人々に話した。其實、喜一郎お霜の夫婦は、人をして其事を花枝親子の耳に入らしめ、永久花枝と友衛が話をする事の出来ないやうに爲やうと、愚にもつかぬ計略であつたのだ。が、其愚にもつかぬ計畫が見事功を遂げた。近所合壁の人々は、喜一郎やお霜から其事を聞いて、それからそれへと事實らしく傳へたのが、何時しか花枝親子の耳にはいつた。今まで友衛の勉強振を見て其一舉一動を見て密かに感心してゐた花枝の親の種彦道子の夫婦や兄の常正は、友衛の墮落した事を聞いて、目を睜つて驚いた。分て花枝の驚きは言語に絶し、一夜泣き明した事も度々有つた。其結果、両親から餘り友衛と話をしては成らぬと宣告された時には、花枝は自分の身を辯解する如くむきに成つて友衛の身を辯解した。けれど、それは何の効力も無かつた。或る時は親に隠れて、密かに友衛に逢ひ、泣いて彼に反省を求めたけれども、道に踏迷つて

ゐる友衛に取つては、泣いて云ふ花枝の熱情も、小鳥のさゝやく聲程にも感じはしなかつた。

悪事千里に傳はるとか。何時しか友衛の墮落した事を耳にした中澤兼一は、友衛の面前に於て、或は歎き且つ怒り、目には涙さへ湛えて改心せん事をすゝめたのだけれど、今の友衛には何の効力も無かつた。しかし、悲憤の涙を流し、一言一句腸を絞るが如き聲で改心せん事をすゝめた中澤の言は、有繋の友衛も、自分の悪かつた事を覺つたのか、其五六日の間は毎日深き物思ひに沈んで居たが、それもほんの束の間、一週間ばかり後には再び横道へ逸れて了つたのである。

x x x x x x x x x x x

ザリ／＼と焼つくばかりの日は酷しく耀いて、道行一人は一樣に、中元の賜答品を大切さうに抱へながら、額の汗を拭ひつて行く。

早盆にも間も無い事だから、どの店もどの店も良く客がはいれるけれど、分けて、氷屋の繁昌と云つたら實に素晴らしいものだ。其氷屋の前を羨まし氣に眺めつて過ぎ、今しも急な九段坂を昇りきつて、招魂社の境内へ踏入つた二人の青年がある。一人は詰襟の白い夏服を着た、二十三歳の生意氣さうな青年で、眉間に漂ふ小皺は、如何にも狡猾さうな相をしてゐる。今一人の青年は、是も同じく二十三歳ではあるが、連の男より稍丈高く、襪の崩れた小倉の袴を穿き、古銘仙の單物を着た容子は、怎う見ても壯士としか見えない。

二人は少時、境内を彼方此方と彷徨ふてゐたが、二人共云ひ合せたやうに大村益次郎の銅像の前へ腰をおろして、一寸顔を見合せ、

『なあ、おい！ 俺はまだ今朝から何にも食んのだから、怎うにかしろよ。』と、壯士の如き男は一寸自分の膝頭へ目を落して『俺は構はんだ。何有。一日や二日食んからと云つて、弱つて了うような長谷川吉藏では無いのだが、怎うも此腹が承

知をせんのだ。』と、指の先で袴の紐の結目を突つく。

『怎うにかしろと云はれても、此頃のやうな不景氣ちや怎うする事も出来ないよ。』と、夏服を着てゐる生意氣さうな青年が云ふ。

『だから、持つてゐる時計を一六銀行へ入れると云ふんだ。』

『入れるのは敢て厭ひはしないが、これを入れて了つたんでは、此方の仕事が能く成つて了ふ。』

『那樣事ばかり云つてゐたんぢや、此方が于乾に成つて了うぞ。』

『心細い事を云ふない！』と、夏服の青年は力強い聲で云つて『可し！ 俺が怎うにかしてやるから少し待つてゐろ。』

『怎うにかするつて、怎うするんだい。』

『怎うしても可いから少し待つてゐろ。』と、夏服の青年は早行きかける。

『ふゝん。』と、壯士の如き青年は鼻で嘲笑つて『早く行つて來い。』

『可し。』と、一言を残して夏服の青年は、葦駄天走りに元來た九段坂下の方へ駈けて行つた。

後見送つた壯士の如き青年は、焼つくばかりの炎天にも厭ひなく、小一時間ばかりも待つた頃、坂下の方から息せき切つて駈戻つた夏服の青年は、玉の如く湧出る汗を拭ひつゝ、

『すいぶん待たせて濟まなかつた。』と、云ひながら上着のポケットから綺麗な女持の墓口を出して『これを見る。』

『どれ……。』と、壯士の如き青年は、墓口の中を詮議てゐたが、急に聲を低めて『山川。貴様やつてきたな？』

『うむ。實はやつてきたんだ。』

『然うだらう。だが、これだけ有れば二人で三四日は大丈夫だなあ。』
『しかし。やつた時に其女め、氣が注いたやうだつたぞ。』

『へえ。此關根てえ女が……。』と、迂濶口を滑らす。

『え！』と、夏服の青年は驚ろきの聲を揚げて『其女を知つてゐるのかい？』

『何有。』と、壯士の如き男は頭を搔いて『こんな物がはいつてゐたんだ。』と、小形の名刺を差出すのを、夏服の青年はチラと見て、

『關根滋子てえのだな。』

二人は少時此名刺に就て話を仕合つた。しかし、やがて其話は他の方へ移り、言の切目に壯士の如き青年は

『おい！ 氷を飲まう。暑くて堪らないぢやないか。』

『うむ。飲まう。俺も先刻から然う思つてゐたんだ。』

二人は殆んど同時に立上つて、電車通りの唯或る氷屋の暖簾をくゞつた。

奇 縁

縞銘山の單物に、黒絹の夏羽織を形よく着流し、髪を長く肩まで垂れて首を隠した青年畫家、中澤兼一は、今しも招魂社の境内を縦に突切り、九段坂上に出た時、其處の交番で巡查と何やら切りに話をしてゐた一人の女が、話終ると共に挨拶もそこ〜に、中澤の後を追つた。

『あ。もし……。』

誰やら自分の聲をかけたと思ひながら、一寸見返る出合頭、其女は驀然に駆けてきた。

『おや。』と、思はず驚いきの聲を揚げる途端、女は苦しき息を發と吐いて

『お呼止め申して、失禮致しました。』

少時女の顔を見つめてゐた中澤は、漸う思ひ出したらしく、

『あ、君か。』と、少し間をおいて『先日はどうも有難う。』

『い、え。』と、競々する。此女は關根滋子である。

『すいぶんお暑うございますわねえ。』と、滋子は強ひて冷靜な態度で云つた。

『暑いですなあ。』と、生新らしいハンカチで額の汗を拭ひ『何時ぞやは角筈で道を教へて戴き、今また此處で會話をする。蓋し奇縁ですわねえ。』

『然様でございます。』と、思つたよりも貧弱な聲が出たので滋子は我ながらはつとした。

『就ては何か御用ですか。』

美事中澤に先を越されて、滋子は再び周章したが、強いて冷靜な態度を装ひ、

『い、え。別に用と云ふ譯では無いのですけれど、一寸お見かけ申しましたから

「は、あ。然うですか。此處では怎うも暑くて不可ん。如何です。不粹の男と氷の相伴をしませんか。」

「然様でございますねえ。」と、忸怩してゐる容子を見て、早くもそれと察した中澤は、

「御安心なさい。後で貴方に尻拭ひはさせませんから……。」

滋子は亦はつとした。此言のやうすでは、自分が躊躇した爲に、此男をして悪く思はしめたのでは無からうか。と彼女は顔色を變た。

「いゝえ。那樣事を思つてゐるのではありませんけれど、始めて口を聞くお方と……。」と、云ひ掛けるのを中澤は、一笑のもとに打消して

「これで二度目ですよ。」
「それは然うですけれど……。」と、息づまるところを押冠せ、

「貴女と僕とは已に知つてゐる者だ。いゝやたとへ二回目にしろ。已に知つてゐる者同志としたらば、何も那樣に遠慮するには及ばないぢやありませんか。さあ行きませう。」

中澤が先に立つて歩き出したので、滋子も詮方なく中澤と肩を並べて歩きながら「でも、未だ貴方のお名前も存じませんし、又、妾の名もお知らせしない中にそ……。」

「あ、然うだつた。僕は中澤兼一と云ふ者ですから。」

「然様でございますか。妾は……。」と、云ひかけて滋子は、帯の間へ手を入れたが忽ち思ひ出して、

「妾は關根滋子と申しますから、どうぞよろしく。」

中澤は僅かに頷づいた。滋子は始めて口を聞いた者と、僅かの時間の中に慙うも親しく成つたのを怪しまずには居られなかつた。こんなに親しくなつたのも、先刻

中澤が云つた奇縁とでも云ふのだらうと彼女は心の中で種々な事を考へた。

『あの、貴方は今日、桐野さんのところへお出に成りませんか。』

『え！』と、中澤は目を睜り『貴方は桐野を知つてゐますか。』

『染々お話し申した事はございませぬけれども、二三度お話し申した事がござい
ますの。』

『あ、成程。桐野の居る家にも貴方の娘がゐましたねえ。』

『其方とも餘り話しをした事が無いのです。』

『では、怎ういふところで貴方は桐野を知つて居られるのです？』

『それは……』と、滋子は忸怩してゐたが、思ひ切つたらしく『あの池島さんの裏に海老原さんといふ家があるのです。其家の娘さんの花枝さんといふ方と、桐野さんと大層仲が良いのでございます。妾も其花枝さんとは仲良しですからそれでお話し申した事がございますのです。』

『成程。で、何ですか。其花枝さんとか云ふ人と桐野と、怎ういふところから然う親く成つたんですか。』

『何でも桐野さんのお身の上に花枝さんが同情成すつたのが元で、今では末の事までお約束成すつたさうでございます。』

『……』

中澤は有繋に驚いて頓には物も云へなかつた。今の如き友衛の墮落も、其花枝とか云ふ女の爲か、もし、然うで有つたとすれば飽まで其女を責ねば成らぬ。けれど中澤には怎うしても其女の爲とは思はれなかつた。否、然う思はれても、即座に花枝と云ふ女の爲に友衛が墮落しのだとは断定を下すのは尙早い。良く花枝と云ふ女の日常の行を聞いた上、断定するのが至當であると、彼は然う思つたのだ。

『で、其花枝さんとか云ふ人は甚麼人です。』

『内氣な温和しい可い人ですわ。貴方も御存じでせう。何時ぞや貴方に道を教へ

た人ですから。』

『あゝ。彼女ですか。』

やはり花枝とか云ふ女の爲に墮落したのでは無いと云ふ事が分つた。彼の心の中は麻糸の亂れた如くに成つた。

『何でも桐野さんが近頃怎うか成すつたとかで、花枝さんは泣いて被在いましたよ。』

愈々其女の爲に落墮したのぢや無いと云ふ事が確かに成つてきた。

『お出に成りますか。』彼女は再び問ふた。

『行きます。』

彼は先日友衛に忠告してからの容子が知りたかつたのだ。滋子は何やら云ひたげに忸怩してゐたが、ついに思ひ切つたらしく、

『妾、今日拘摸に墓口を掏られて了ひましたのよ。』

『へえ。』と、中澤は驚いて『何處で？』

『九段下です。白い詰襟の服を着た二十二三の人でした。』

『ふうむ。』

二人は何時の間にやら氷屋の前に來てゐた。

『では此處へはいりませう。』

中澤の後に尾いてはいつた滋子は、始めて口を聞いた人に散財させるのを氣の毒にも思ひ、又、自分でも心苦しかつた。滋子等二人がはいつてきた時、向方の隅でパンを食しながら氷を飲んでゐた先刻の男の内、夏服を着た青年が目早く滋子の姿を見止め、連の壯士の如き男に一言二言小聲でさゝやいたが忽ち此家を飛出した。其物音に驚いて偶と其後姿を見た滋子は

『あれ！』と、けたましく叫んだ。

『何うしました。』と、中澤も驚いて滋子の顔を見つめる。

『妾の墓口を掏つた拘摸が……。』と滋子は其方を指さす
『え。』

中澤は急いで入口まで出て見たが、早其男の姿は見えなかつた。

『はいる時に分つたなら、逃しは爲なかつたものを、惜しい事をした。』と、中澤は吐き出すやうに云つて、再び元の席へ腰をおろし『おい。氷牛乳をくれ。』と、滋子の方へ向き直り『貴女は好きなものをお取なさい。』

『然うですか。ではレモンにして戴きます。』と、恥かしさうに云ふ。

『おい。レモンを一つ。』と、注文しておいて、再び滋子の方に向直り『貴方のお住居は桐野の居る家の近所ですか。』

『いゝえ。ずつと離れて居ります。妾の家は柏木ですもの。』

『え？ 柏木？』と、自ら其一言を反覆した中澤は何やら密かに思ひ當るところがあるらしかつた。

『貴女は御存じ無いかは知りませんが、柏木に關根達次と云ふ畫家を知りませんか。』

『それは妾の兄でございます。』

『え！』と、中澤は又もや驚いたが、滋子も驚いた。何うして中澤が自分の兄を知つてゐるのか。彼女は怪しみますにはゐられなかつた。

中澤とても同じ事、同窓の友の關根達次が、此女の兄だとは、今迄思ひ設けぬ事だつたので、彼は只々驚ろきの目を睜るのみ。

『貴女が關根君の妹君でしたか。然うですか。やはり先刻僕が云つた通り奇縁ですなえ。』

『然様でございますわねえ。』と、滋子も感慨無量の躰。

『して、關根君は相變らず健壯ですか。』

『はい。お蔭さまで壯健でございます。』

■ 奇 縁

『お歸りに成つたら、京都の中澤がよろしく云つたとお傳へ下さい。』

『貴方が京都の中澤さんで被在るのですか。お噂は兼て兄から承つて居ります

兄が美術學校に居りました時に、同じ級で一番仲良しだつたさうですのねえ。』

『然うです。一番仲が良かった代りに、又良く喧嘩もしましたよ。』と、云つて中

澤は邊もは、からず大聲で笑つた。

此時突然、氷を運んで來た女中が、これも大きな聲で

『お待遠さまあ。』

滋子は其聲の大きいのに、思はず失笑さうとしたが、漸く耐えて、中澤の方を一

寸見つめ、

『では御馳走に成ります。』

『どうぞ。』と、中澤は一匙口に入れて『豪い大きな聲を出す女中ですなあ。』と、

小聲で云ふ。

● 凶 報

滋子は微かに頷づいて、可笑さを耐えた。

折しも、後に居た壯士の如き客は、密かに女中を呼、仕拂を濟ませてそこへ

氷屋を立出た。二人は那樣事を知つてか知らずにか、相變らず談し合つてゐる。

此數日、一点曇り無き好天氣は續いたが、それに反して、常に不愉快な日を送つ

てゐる友衛の心には、何か晴やらぬ憂き曇が懸つてゐるのであらう。彼は夕刻學校

へ行く時の他は、終日机の前へ端坐したきり、切りに何やら深き物思ひに沈んでゐ

た。今日も常の如く朝から机の前へ端坐して、深き憂ひに沈んでゐたが、階段を昇

る軽い足音に驚ろかされ、屹と後を見返れば、自分が嫌ふ清子が、手に一枚の端書

を持ち、これも何か憂き事があるのか双の眸を潤して、力無くはいつてきた。友衛は世にも迷惑さうな顔をしたが、詮方無しに向直り

『清ちゃん。叔母さんは？』

『四谷まで行つたわ。』と、力無く云ひながら友衛の傍に坐り『友衛さん。これ……』

友衛は差出された端書を受取り一目見て忽ち呀と驚ろき、顔色は見る／＼蒼白に變じ、端書を持つた手はワナ／＼顫えた。

『友衛さん。』と、清子は苦しき息の下より其名を呼『貴方は甚麼悪い事をなすつたの？』

『……』

友衛は發と長い溜息を吐き、其端書を見つめたま、何とも答へなかつた。

『隠さずに云つて下さい。いくら貴方に嫌はれてゐる妾でも、貴方ばかりに苦し

い思ひをさせて、傍にゐて冷たい目で見てはゐられません。』

『……』

僅か一枚の端書の爲に、怎うして二人共憂へてゐるのだらう。そも此端書には甚麼事が書いてあるのであらう。それは、今より凡そ四十日余り前、友衛が墮落して可也深みへ踏込んだ時の事である。彼の長谷川、山川の二人の爲に欺むかれ、國から送つてきた定規乗車券を購ふ金を使ひ込んだ爲、悪い事とは知りつゝ、二人にすすめられたま、此の定規乗車券を改竄して了つたのである。

かゝる事が何時まで知れずにおやう。忽ち水道橋驛の驛員の爲に發見され、驛長の面前に於て始末書を書かされたのであつた。それから日を送る事四十日、今日の端書は、芝西久保巴町の東京區裁判所から來た召喚狀で、十五日の午後一時までに出頭せよとの文意であつたのだ。

友衛が此端書を受取つた時の驚ろきは、急に後から何者にか喉を締つけられたや

うな息苦しさを感ずると共に、激しき瞑眩もした。

「ねえ。友衛さん。怎うなすつたの？ 早く云つて下さいよ。妾、氣に成つて詮方が無いのですから。」

「……………」

友衛は猶答へなかつた。

「友衛さん。妾がこれほど心配してゐるのが貴方には分らないのですか。」

「いや…………。良く分つてゐるよ。」

「では、早く云つて下さいよ。ねえ。」

「…………。友衛は又黙つて了つた。」

「ねえ。怎うしたんですよう。隠さずに云つて下さい。貴方と妾との間には秘密は無いぢやありませんか。」と、清子は又促がす。

「それは無いさ。」と、友衛は力無く云ふ。

「無ければ云つて下さい。」

「…………。」

「然うして隠して被在るところを見るとやはり、貴方は妾にまで秘密にして被在るんですのねえ。」

清子はさも不平さうに、涙に満た目で友衛の顔を見上た。

「然うぢや無いよ。」

「だから、無いとしたならば早く云つて下さい。」

「僕は怎うして可いかわからない。」と、友衛は其處へ突伏して、頭の毛を掻き耄つた。

「友衛さん。妾は…………妾はね。」と、清子はおろおろ聲で「妾はね。貴方が裁判所へ呼出されるやうな悪い事をなすつたからと云つて、氣を變るやうな、那樣…………。那樣冷たい心は少しも持つてゐないのです。妾は貴方と一緒に、聞い、冷たい

恐ろしいあの牢へでも喜んで行きます。それなのに、貴方は飽まで隠さうなんてそれは餘り酷いわ。』

『濟まない。濟まない。』と、漸く顔を上げる。

『餘り……酷いわ。』

そゝろに繰返した清子は、耐えかねて袂を顔に押當て、衝と友衛の膝元へ泣き伏した。

『……』

友衛は腕を組んで清子の哀れな姿を見つめてゐる。

清子は無理に泣かじと喰緊る、齒の隙間より微かに洩るゝ、三味の糸より尙細き忍び泣き音はいと悲しく、また哀れに聞えた。

『清ちゃん。決して心配してくれるな。僕は別に悪い事をした覚えは無いが、僕友の達で悪い事をした者が有つて、其引合に出されたのだらう。』

清子は此時偶と顔を上げて、

『屹度……然うなんですか。』

『僕の言を信じてくれ。』と、一寸耳を稜て、『誰か下に來てゐるやうだぞ。』

『然う？』と、立上つて行こうとするのを、友衛は急に呼止めて

『何事も秘密にしておいてくれ。』

『え、云はなくても分つてゐるわ。』と、急いで階段の際まで行つて下を覗き、

『あら。上山の俊一さんですよ。』と、云ふ聲に續いて足音荒く昇つてきた男は、友衛とは従兄同志で、友衛より五つ上で二十四歳、上山俊一と云つて、徴兵検査が濟むと直ちに渡満し、滿鐵の馬車部にはいつて働いてゐたのが、四月下旬、久々に歸郷したのである。

『やあ。お睦ましい事……。』

と、俊一は何時もの通り冗談口を叩きながらはいつてきた。常ならばこれに對し

て一言二言の冗談を云ふのであるが、今日は冷やかな一瞥を俊一の方にくれたゞけで俯むいて了つた。

『おや！ 今日は何うしたんだい？ 少しも元気が無いぢやないか。』

『何有、別に……。』と、友衛は始めて苦笑を洩らした。

『別にぢや無い。元気が無いばかりか、今日は顔色が第一よろしく無い。何うかしたんだらう。』

『まったく何うもしないんだ。』

『ほんとうか。』

『實際！』

『ふうむ。暑いからなあ。屹度暑さ負でもしたんだらう。氣を注げ給へよ。今は悪い病氣が流行るから。』

『有難う。』と、友衛は無意識に禮を云ふ。

友衛は俊一にかく云はれると、何となく心苦しく感じた。彼には飽まで憊うして白々しく人を欺むいてゐるのが、何よりも不愉快な事でも有つたし、心苦しくも有つたのだ。

『家の親父も心配して居つたぞ、近頃は少しも見えないが何うしたんだらうと云つて。』

『然うだらう。近頃は少しも顔出しをせんからねえ。今晚お伺ひしやう。』

『屹度來給へ。待つてるから。』

『うむ。屹度行くよ。』と、友衛は發と溜息を吐いて『時に今日は何か用かね？』

『然うぢや無いんだ。一寸此先まで來たから寄つて見たまでさ。』

『……。』

『おい。餘り激しい勉強は止せよ。清ちゃんも然うだ。未來の良人だなんて、勉強させては不可んよ。』

「あら。妾、勉強なさいなんて云つた事ありませんわ。」

「何うだか分かるもんか。」

「いゝえ。ほんとですよ。」

「まあ可い。これからも良く注意してくれなければ不可よ。友衛君は餘り身體の
壯健な人ぢや無いのだから。」

「えゝ」と、清子は頷づく。

「ねえ君。晩なんて云はないで、これから行こうぢやないか。散歩すると思つて
……。」

「日中は止さう。」

「然うか。では晩に來給へ。いや、大きにお邪魔。」と、俊一は立上る

「もう歸るか。」

「餘り手間取とお目玉頂戴だ。」

「然うか。では叔父さんにも今晚行くと云つておいてくれ給へ。」

「あゝ。」

此一言を後にして、俊一は荒々しく階段を駆下つた。後で友衛は、少時腕拱いて
考へてゐたが、急に衝と立上り、

「清ちゃん。これから中澤君の處へ行つてくるから……。」

「然うですか。ぢや、成るだけ早く歸つて被在いな。」

「うむ、直ぐ歸つてくるよ。」

友衛は柱にかゝつてゐた帽子を取るより早く、

「ぢや、行つてくるよ。」

友 情

かへり 咲

新宿終点で電車を降した中澤と滋子はそれより、真直に煙草専賣局前を通り、専賣局について左へ曲る角の處で、二人は云ひ合せたやうにパツタリ止まつた。

「妾はこれでお別れ申しますから、お歸りの際はどうかお立寄下さい。」

「はあ。有難う。お歸りに成つたら兄さんによろしく。」

「貴方もどうぞお歸りの時はお寄り下さいまし、妾、お待ち申して居りますか

其時、今日のお禮は改めて致します。」

「何有。高が五錢位……。」

「いゝえ、五錢でも妾に取つては尊いお金ですわ。もし、貴方に九段で逢はなか

かへり 咲

つたち、妾は九段から歩いて來なければ成りませんもの。」

「は、僅か五錢の金でも時によつては十圓二十圓より尊い者になりますねえ。」

「ですから、其お禮は兄と二人で致します。」

「何有。那樣事をして戴いては却て迷惑します。」

「では、お待ち申して居りますから、お歸りの時はどうぞ……。」

「有難う。ではこれで失敬します。」

「御免下さい。」

二人は右左に別れた。中澤は専賣局の横の細道を真直に、口の中で小声で詩を吟じながら行く時、専賣局の裏手の道から急ぎ足で出てきた友衛とパツタリ落合つた

「おや！」

「おう。」

二人の口からは殆んど同時に、同じやうな言が流れ出た。

「今、貴方のお宅へ伺ふ心意で出て来たんですよ。」

「然うか、俺も君の所へ行こうと思つて来たのだ。」

「然うですか。」

「怎うだな。近頃は少し慎しんでゐるか。」

「……。」

「怎うだ。」

「……。」

友衛は中澤に怎う云はれる度に、穴でも有ればはいりたいやうな気がした。

「返事が無いところを見るとやはり、慎んで居らんと見えるな。」

「中澤さん。」と、友衛は力の無い聲で其名を呼「私は其事で、貴方に合せる顔が無いんです。」

「何？ 何を云ふ。」

「是を見て下さい。」と、友衛は懐中から二つに疊んだ端書を出して「中澤に渡した。」

「何だ？ これは。」と、中澤は開いて見て忽ち呀と驚き「桐野！ これは裁判所から来た召喚状ぢやないか。」

「然うです。」と、弱々しく云ふ。

「桐野！」と、言鋭く「何うしたのだ。」

「……。」

「此場合、黙つてゐたのでは分らん。隠さず云つて見い。」

「私も其事を云ふ爲に貴方のお宅へ伺ふ心意で来たんですよ。」と、友衛は、怎うかはれると却て張合がついて、長谷川山川の二人に欺むかれた事から、遂に定規乗車券を改竄した事等。總ての事情を具さに物語つた。

聞き終つた中澤は發と深い歎息を洩らし、

『飛んだ事をしてくれた。』

『私は貴方に合す顔が無い。』

『僕の事は第二だ。それよりも君は國の御兩親に對して何と云つて申譯をする。』

『……』

『御兩親が多年の心配も、苦勞も今に成つては水の泡だ。』

是を思ひ彼を思ふ中澤の心は、縛れた糸の如く掻き亂れ、彼の目からは霞の如き

涙が湧出した。友衛の兩親の心を推量れば、兩親の心を知らぬ友衛が憎く成り、憎し

と思ふ友衛は自分が弟の如く思つてゐる者である。

嗚呼。此好箇の好青年、自分でも前途の成功を夢見つゝ、専ら學事に心を傾けて

ゐた友衛をして、かくの如く墮落させたのは、そも誰であらう。噫、何といふ憫れ

な事だらう。將來有爲の青年をして、生涯此社會から葬り去つて了うとは。

中澤は友衛を、かくの如き淵に沈めた周圍の人々が憎らしかつた。けれど、その

憎しみは何にも成らなかつた。

『僕は池島さん一家の者が憎らしい。噂に聞けば甚しく君を虐待してゐるさうだ

其結果君は自棄に成つたのだらうが……』

『……』

友衛は物も得云はず男泣きに泣いた。

『こら！何を泣く。君が泣くよりも僕の方が餘程泣きたい。僕が東京へ出てく

る時、君の御兩親は僕に慙う云はれた。桐野の家は昔から、血統の直しい家だか

ら、もしも、今の代に成つて、友衛でもぐれて了つたら、先祖に對して申譯が無

いど。それも老人の口癖か知らないけれど、子を思ふ親心は其文句に依つて充分

分つてゐる。君は此前何と云つた。焼野の雉子の譬を引いて立派な口を聞いたで

は無いか、其時、僕は實に嬉しかつた。嬉しくて嬉し涙がこぼれた程だ。けれど

その喜びは糠喜びに成つて了つた。桐野僕は自分の弟を失つたより未だ悲いぞ。』

「……。」
「で、此先何うする心意だ。」

「潔よと罪に服するまでです。」

「うむ。公文書偽造の罪は重い。重いが其罪に服せ。僕は君が再び此無情な社會に出てくるのを待つてゐるぞ。」

友衛は又泣いた。

「私は再び歸つてくる氣は有ませんから。親のところはどうぞ宜しく願ひます。」

「其事は安心せい。誓つて僕が引受た。」

「有難う。」

友衛はゾロ／＼と歸つてくる專賣局の女工どもに涙を見せじと慌て、押拭つた。

「桐野。僕は可笑な事を耳にしたが……。」と、中澤は云ひかけたが有繋に躊躇した。

「何ですか。」と、友衛は訝がし氣に聞く。

「君は海老原花枝とか云ふ女と、何か約束したさうだが。」

「……。」

友衛は恥かしさうに逡巡する。

「だがなあ。僕は其事は咎めない。或人から聞いた事だが、君は花枝とかいふ女と夫婦の約束をしたさうだなあ。しかし、或る人から聞くに、其女は溫和なしい可い女ださうだな。」

「……。」

友衛は猶忸怩する。

「十五日と云ふと明日だなあ。」と、中澤は友衛の顔を見る。

「もう逢ないかも知れません。」と、友衛は堪り兼ねて、横を向いた。

「では中澤さん。親の事を頼みます。」

『うむ。』

『では、最うお別れします。』と、友衛は一寸頭を下て立去つた。

『おい待て。こらつ！』と、呼ばれて友衛は一寸振むきさま

『中澤さん。』と、一聲その名を呼び一散に元來の道を駈出した。

『おい。待てよ。』と、云つたが友衛の姿は早專賣局の角を曲つて見えなくなつた

中澤は二三歩傾倒るやうに追かけたが、其まゝ直と足を停めて、涙に満ちた瞬き
發と長い溜息をついた。

雨降る日

明方よりシト／＼降り出した小雨も、七時頃からは本降りど成つたにも係はず、

種彦道子の夫婦は、赤坂の親籍へ行つたので、後は常正と花枝の二人に成つた。

昨日の晴は今日の雨。うき世の變轉ほど激しいものは無い。花枝は今日午後一時

に、友衛が裁判所へ出頭すると云ふ事は知らう筈無く、窓際へ進み寄つては池島の

二階を見、机に向つては筆を持つたが、絶えず常正が附纏ふてゐるので、思ふ手紙

も書く事が能ず、苛々しながら時を過す中、早九時も少し過ぎて了つた。

『兄さん。妾少し考へ事が有るんですから少し妾の傍を離れて下さいな。』

花枝はついに耐えきれず、兄に向つて恚う要求した。

『馬鹿な事を云ふな。此机は僕のものだよ。僕が傍に居て不可なかつたら、お前

が勝手に此處を立退くさ。』

『でも、手紙を書くんですから。』

『向ふへ行つて書きなさい。』

『え、では向ふへ行つて書きますよ。』

花枝はボン／＼腹を立て、茶の間へきた。花枝が茶の間へ来てから五分も経たぬ内に常正は、又、ノツソリとはいつてきた。

『あら。また。』

『然うボン／＼怒るものぢや無いよ。話相手が無くて一人で凝乎としてゐられるものか。』

『でも……。』

『手紙は後で書いたら可いちやないか。』

『では、然うしませう。だけど、後でまた邪魔をするんぢや無くつて？』

『決して致しません。』

花枝は巻紙と硯箱を向ふへ押遣つて、兄の方へ向直る。

『花枝、阿父さんや阿母さんは、彼の英吉君をお前の婚にするさうだよ。』

『え？』と、花枝は驚いて兄の顔を見目茂りつ、『ほんとの事なんですか。』

『ほんとの事さ。』

『まあ。可厭な事。』と、花枝は顔をしかめる。

『僕も彼んな者は可厭だが、阿父さんは大いに信用して被在るやうだ。』

『でも、妾は飽まで可厭ですわ。』

『お前さへ飽まで不承知を唱へれば、此事は纏りつこは有りはしないが……。』

『え、飽まで可厭です。』

『それに就てだ。』と、常正は言に力を籠め『お前は何か僕に隠してゐる事が有るだらう？』

『い、え、別に。』

『い、や、確かに有る。』と、常正は袂を掻い探つて一通の手紙を出し『僕は此間こんなものを拾つたがなあ。』

花枝はそれを一目見るや、忽ち呀と驚いてそれを取戻さうとするのを、常正は手

早く袂の内へ振込んで、

『どつこい。然うはさせないよ。』

『兄さん。後生ですから返して下さいな。妾の一生の願ひ。』と、泣出しさうな

顔をする。

『それは返さない事もないが。』と、常正は眞顔に返つて『それならそれで、嘘を

吐かず、隠さずに云つて御覧。其話の模様によつては此兄が、随分力になつても

やらう。』

『……………。』

『さあ。隠さずに云つておしひ。』

『兄さん。妾、もう。隠さず云つて了りますから、阿父さんや阿母さんには隠し

ておいて下さいな。』

『あ、可いとも。』

『妾……妾』と、花枝は幾度か云ひ濫つたが、ついに思ひ切つて『妾、阿父さんや阿母さんには濟まない事ですが。彼の友衛さんとお約束して了つたのです。』

『然うだらう。僕も實に桐野君ならばと思つてゐたのだ。』

『兄さん。貴方も……。』と、花枝は嬉し氣に云ふ。

『桐野君が墮落したと云ふけれど、その罪は池島さん一家の者にある。桐野君に

も其罪が無いとは云はぬが、桐野君、其者ばかりを責めるのは酷だ。』

『然うです。然うですわ。』と、花枝は狂氣の如く叫び『餘り友衛さん一人を苛め

過ぎたんですわ。』

『それは桐野君と雖も、未だ二十歳前の者だもの、一時は迷つても其中には、ま

た覺める時機もあるさ。』

『え、覺めますわ。妾の一念でも覺まさすにはおきません。』

花枝は言強く慙う云つて、兄の顔色を覗がつた。』

「然うとも。お前の其心一つでも、桐野君は改心する。」
「妾は其時が待遠しい。」

「お前は怎ういふ機動で桐野君と……。」

「妾は彼人が余り苛められるのを氣の毒に思つたのが、其機動なんです。」
「で、手紙の遣取りは？」

「つい此頃からです。けれど、妾の方で遣るばかりで彼人からは少とも來ないのよ。」と、花枝はホロリとする。

「これも桐野君に遣る手紙の下書かい？」

「然うですの。」

「しかし、餘り手紙は遣らない方が可いよ。阿父さんや阿母さんに見つかる事だぞ。」

「え、。」と、花枝は殆んど聞取れぬ程小聲で云つた。

「けれど、兄さん。池島の叔母さんは清子さんと友衛さんを一緒に爲やうと思つてゐるんですよ。」
「那樣事は思つてゐたつて構ひはしないぢやないか。」
「でも……。」
「心配かな。」
「……。」花枝は忸怩する、
「那樣に心配を爲なくても可いさ。お前に對する英吉君の如しさ。」
「でも……。」
「桐野君は清子さんを怎う思つてゐるね？」
「嫌つてゐるわ。」

「では、心配する事は無いぢやないか。今から取越苦勞は未だ早いよ。」
常正は譯もなく一笑に附して了つた。兄に然う云はれて見れば成程、然う思はれ

るが、何時、友衛の心が變るか分らないと思へば、彼は其場を笑つておさめる譯には行かなかつた。』

『でも、兄さん。男心と秋の空とか云ふ事が有りますよ。』

『それが、女の取越苦勞だと云ふのだ。人間などと云ふものは疑ひ出しれた際限の無いものだよ。不用ぬ心配など爲ない方が可い。』

常正は少しも氣に留めてゐぬらしい。花枝は、男と云ふものは總て此兄のやうに女の如く細かいところまで考へて、くよくよ心配などしないものだと思つて了つた。友衛もやはり此兄のやうな氣であるに違ひない。と、すれば何も那樣にくよくよ心配する必要は無いと思つた。

『兄さん。此の事は誰にも内容よ。』

『分つてゐるよ。お前もすいぶん諄いねえ。』

『では、兄さん。其手紙を返して下さい。』

『あ、然うく。すつかり忘れてゐた。』と、常正は再び袂から手紙を出して、『見つからぬ中に焼いてお了ひ。』

『え、然うしませう。』と、花枝は其手紙を火鉢の中に入れた。

無残、無残、花枝が心を籠めて書いた手紙も、一度火中に投ずれば、紫色の煙は室内に漲り、やがて火鉢の中には黒き死骸を止めた。

『しかしなあ。花枝。お前と桐野君ばかりで約束しても、桐野君の御兩親は何と云はれるかなあ。』

『妾も其事が氣に懸りますから度々友衛さんに聞いたんですよ。』

『ふうむ。而して怎うした？』

『而したら友衛さんは……。』

『困ると云つたか。』

『いゝえ。』

「何と云つた。」

「其方の方は心配は無いと云ひました。」

「ふうむ。それは良かった。」

常正が安心しても花枝は猶安心する事が能なかつた。

『でも、妾は未だ、友衛様の御南親を見た事が無いのですもの。』

『何有、大丈夫。桐野君の容子を見て、其親御様の心も大概分つてゐる。』

『大丈夫でせうか。』

『桐野君が心配無用と云つたとすれば大丈夫心配は無。』

常正の云ふ事する事が万事安受合なので、彼女は猶不安であつた。

『花枝、すいぶん喋つた爲か、大分腹が北山に成つた。おい。今日はお前が奢る日だぞ。』

『未だ時間が早いわ。』と、詮方なしに云つた花枝は、自分が心配してゐるのに反

して、兄の暢氣極まる事を云つてゐるので、彼は只管呆れざるを得なかつた。

『馬鹿な事を云へ。お天道様の居所を御覽、やがて影が真直に成るよ。』

『お氣の毒さま、今日は雨が降つて居りますよ。』

『雨が降つてゐたら時計を御覽。』

花枝は徐かに時計を見た後、帯の間から墓口を出して

『幾金。十錢?』

『二人だから十錢有れば澤山。』

『では、兄さん行つて来て下さいな。妾は少し用がありますから。』

『へん。又手紙か。』と、常正は十錢銀貨を握つて不承無承立上る。

『然うちや無いのよ。』と、花枝は衝と立上り、早く行つて被在いよ。』

鐵假面

『やあ。朝から兄妹喧嘩とは恐れ入ったね。』と、今しも常正が花枝から十錢受取つて出やうとする處へ、慍う嘸鳴りつゝ、はいつて來たのは、兄妹の從兄にあたる英吉である。年齢は常正より二つばかり若く見えて二十四五歳、顔色の生白い、一寸女好きのする容貌である。

『何有。喧嘩ぢやないが、今此奴に奢らせるんだ。』と、常正は花枝を指さす。

『へえ。其奴は有難いねえ。』

『おい。君も出さなくては仲間へ入れる事が能ん。』

『おやく。少し當が外れた。』と、英吉は墓口を出して『僕は幾金だね？』

かへり咲

『まあ。君の事だから二十錢に負けておいてやらう。』

『負けて二十錢？』と、英吉は目を睜つたが、花枝の手前。うんと氣張つて二十錢銀貨をさも残り惜し氣に常正の前へ突き出すのを、常正は横目に見て、

『君は僕等の仲間ぢや新參者だから、君が買つてくる番だ。』

『へえ。金を出して使ひも……。』と、英吉が呆れてゐる顔を花枝は、冷やかに一瞥して

『英吉さん。貴方は何をぐづぐづしてゐるのよ。早く行つて來たら可いちやないの。』

『行きますよ。常正君。花枝さんが奢ると云つた金は？』

『君、三人で大福が十錢づつ、食はれるか。まあ、花枝が出した金は後日君が來た時に爲やう。今日は君一人で奢つて置くさ。さあ。然う定まつたら早く行つて來たまへ。』

かへり咲

「へえ。」と、英吉は呆れて、急には立たうとしなかつた。

「まだ行かないの？」と、花枝の鋭い一瞥を喰つて英吉は、二十錢銀貨にメリンスの風呂敷を持つて横飛びに表へ飛び出した。後見送つた常正は「あは、は、は、は。」と、大笑して

「先生、大分驚いたと見えるわい。」

「彼の出で行き方つたら無かつたわ。」と、花枝も笑ひ崩れる。

「嫌な奴だねえ。彼奴は。頭をチツクかなんかでピカ／＼光らし、おまけに香水の香ひをブン／＼させてきやつた。」

「然うねえ。」

「花枝。彼奴はねえ。お前の云ふ事だと、何でもはい／＼と云つて聞くんだよ。餘程鼻の下の長い奴だねえ。」

「ほんとに可厭な奴ねえ。」と、花枝は兄の方へ向直る。

「僕は彼奴が来ると胸糞が悪くなつて了うんだ。」と、常正は顔をしかめる。

「兄さん。先刻の十錢を返して頂戴。」

「僕が貰つておかうと思つたら駄目か。」

「兄さんに預けておくと直ぐ煙に成つて了いますもの。」

「すつかり先を讀れて了つた。」と、常正は十錢銀貨を花枝の膝元へ投出す。

此時、大福二十錢買つて歸つてきた英吉は中へはいるなり、大きな聲を立て、

「能たてのほやく。」

「待つてました。」と、常正は唝鳴りかへす。

英吉は其處へ包を投出して、擴げるが早いか一つ頬張り、

「うむ。甘い／＼。」

「では、御馳走に成つてよ。」と、花枝もつまめば常正もつまむ。

「花枝。茶を……茶を。」と、常正は目を白黒させてゐる。

「餘り慾張つて頬張るからよ。」と、花枝は可笑しさを耐えて茶を出すのを常正はグツと一息に飲み干して、

「うむ。苦しかった。」

其時、英吉は何を思ひ出したのかボンと膝を叩いて、

「あ、然うく。」

「何有。」と、花枝と常正は一樣に英吉の顔を見目茂る。

「今ね。僕がこれを買つて歸る時。前の家にある、何とか云つたつけ、桐……原

とか、桐……野とか云ふ奴ねえ。」

花枝と常正は共に目を見合せ英吉を見つめる。

「彼奴。可笑しな風をして何處かへ出て行つたよ。」

花枝は知らず識らず俯むいて了つた。甚麼可笑しな風をしてゐても、英吉よりも遙かに可い。其心掛といひ、總ての点が英吉より上であるのに、人の事を罵る英吉

の、餘程自惚心の強いのに花枝は呆れた。

「僕は彼奴が大嫌いだ。顔を見ても癢に觸るよ。」

「君が然う思つてゐれば、向方でもやはり然う思つてゐるに違ひないよ。」と、常正は横槍を入れる。

「しかし、氣障な奴だねえ。」

「英吉さん。」と、花枝は堪りかねて「貴方は良くも平氣で人の悪口を云はれるわねえ。」

「何……悪口を云ふのぢないけれど……實際然うなんだもの。」

「餘り人の悪口などを云ふものぢや無くつてよ。これが其人に聞かれないから可いやうなもの、もし其人が聞いたら何う思つて？ 決して可い氣持はしませんよ。貴方の前で妾と兄さんが貴方の悪口を云つたら、聞いてゐる貴方は甚麼心持がします？ 決して可い氣持はしないでせう。」と、花枝は手酷く云ひ込めた。

かへり咲

『……………』

英吉は思ひの他の花枝の一言に、言句が詰まつて只目を睨むのみ。

『負ふた子に淺瀬を教へらるとは此事だ。年長の英吉君が年少の花枝に其道を教へられて一言無いとは可笑しいねえ。』と、常正は苦笑して英吉の顔色を伺ふ。

『今日始めての事ぢや無いよ。僕がいつも彼奴の事を云ふと、花枝さんは目色を變へて彼奴の最負をするんだよ。』

『え、最負してよ。それが怎うかしたんでせうか。』

『あれだもの。』と、英吉は、常正の顔を見て其不平を訴ふるが如く云ふ。常正は何處を吹くかといふやうな顔をして、平氣で食し且つ飲んでゐる。

『花枝さんは、知らぬ他人を最負して、從兄の僕を少しも……………』と、云ひかけるのを常正は急に引取つて

『最負しないと云ふかね？』

かへり咲

『……………』

英吉は恨めしさうな顔をする。

『人を讒謗罵倒するは小人の常。石黒英吉君としては、聊か思慮が足りないやうだが。』

常正は、眞綿で首を締るやうにジワ／＼と急所を突く。英吉の恨めしさうな顔色は、追々嫉妬の色と變り、云ふ言も前と變つて鋭く、

『おや！ 君までが彼の貧乏書生を最負するのかい？』

『い、や、僕は別に最負はせんが。』

『では……………』

『では……………何かね？』と、常正は問返す。

『最負をせんと云ふならば、君等兩人は當然親籍の僕……………』

『君の方へ味方しろと云ふのか。』

『それが當然の事だらう。』

『少しも當然の事はないよ。』

『何故？』と英吉は不服顔に『如何に親と親とが親籍交際をしても、子と子が他人交際をしたのでは……。』

『僕が他人交際をしてゐるかね？』

『してゐるぢやないか。』

『何時？』

『現に今……。』

『ほ、う。僕が君の味方をせんと云ふので、君が他人交際をしてゐると、君は慙う云ふんだね。』

常正は嘲笑ひつゝ、相手の顔を凝乎と睨みつめて、シリ／＼と膝をすゝます。常正が餘り自分に接近してくるので、英吉は薄氣味悪く感じて、それを避けるやうに

して坐り直し、常正をグツと睨め返した。二人の間には少時睨らツ競が續く。傍で見えてゐた花枝は急に空恐ろしく成り、成るべく静かに兄の袂をちよい／＼引いたが、常正はそれを知つてゐるのか知らないのか、相變らず相手を睨みつけて、

『さあ、英吉君怎うだ。君は然う云ふのか。』

恚う云はれて見れば英吉も中々負けてはゐない。二人の容子が恚うなつて見ると

口論は倍おいて意地づくた。

『無論！』と、英吉は肩臂を張る。

『馬鹿な……。』と常正は崩れるやうな笑ひかたをして『君は餘程足りないねえ。』

『何？』と、英吉は片膝を立て、『君は僕を馬鹿だと云つたね？』

『云つた。云つたが怎うした？』

常正も又片膝立て、云つた。

『失敬な……君も餘り失敬な事を云ひ給ふな。』

『何が失敬だ。僕が先刻云つた通り、僕は彼の桐野君の最負はせん。が、又君の味方もせんだ。僕は只、君が余り桐野君を罵るから其非なる事を云ひ、物の順序なるものを説いたのみだ。敢て僕は君に喧嘩を賣らんが爲に慍ういふ事を云つたのぢやない。それを分別する事の能ない者は馬鹿に違いないのだもの。』

常正の理ある一言に英吉は、先刻の勢が何處へやら消飛んで、げんなりして了つた。此時、花枝は漸やう安心して、

『もう、二人共那樣事を云ふのはお止しなさいよ。英吉さんも餘り人の悪口を云はない方が可いわ。』

此場合、英吉は花枝に慍う云はれたのが何よりも嬉しかった。渠は急にまた元氣づいて何時ものやうにはしやぎ出した。

『何うだい常正君、只斯うして食つて飲んでゐたのぢや面白くない。一つ拳でもやらうぢやないか。』

塵の巷

『よからう。大いにやらう。』

二人の間には忽ち和議なつて、此度は拳の喧嘩と成つた。其物腰といひ、可笑しな手振の滑稽さに、花枝は一人可笑しさに堪えかねて笑ひ崩れる。

午少し過ぎから雨は止んで、空を蓋ふた薄墨の如き雲の妙間から、日の光は酷しく耀やいた。午後一時にも間もない頃。

表通りで電車を降りた友衛は、どうやら人目を忍ぶといつたやうな風で、俯むきながら電車を少し戻り、大きな通りを左に曲つた出合頭に、空車を引いてきた車夫に向ひ、

『一寸、お伺ひします。』

『はあ。』と、車夫は懈るさうな聲で返事をして車の轆を控へる。

『區裁判所は何の邊でせう。』と、小聲で尋ねる。

『裁判所?』と、車夫は思はず大聲で反問した。

『え、』と、友衛は俯むきながら小聲で云ふ。

『裁判所なら是を真直にお出に成つて突き當つたところを左へ曲ると右側です。』

『然うですか。どうも有難う。』

友衛は此教へられた大通りを真直に行つて突當り、それから左の方へ細い道を少時行くと、成程右側に宏壯なる建物があるので、渠は此處だと思ひながら束々と門の隣まで進むと、側の古い板に『東京芝區裁判所』の字が僅かに讀み得た。

兼て覺悟はして來たもの、今此明るい社會から、此の暗い穢れた處へはいつて了はなければならぬのだ、一度此穢れた門をくゞつて了へば、再び此明るい社會

へ出てくるのは何年後の事であらう。せめて此事を花枝に話してきたかつた。後で自分が裁判所へ行つたと聞いたら花枝は甚麼に驚ろくであらう。甚麼に自分を恨むであらう。彼はこんな事を思ひ出すと、これから飛んで歸つて花枝に一目逢つてきたかつた。けれど、一時にはもう間もない。と、思つたが、それでも此大きな門をくゞる勇氣は無かつた。友衛は其門前をうろくうろついてゐたが、偶と氣が注くと、其前の通りにある代書所の店前にゐた數多の客が、友衛の姿に注目して笑つてゐるので、従は夢中に成つて門内へ飛込んだ。嗚呼、もう長い間社會の風に逢ふ事が能ないのだと信するや、彼の頬には玉の如き涙が光つた。

正面には囚人馬車が二臺も來てゐる。其右側の處に多勢の人が集まつてゐる、待合室らしい處が有つたので、友衛は一先其處へ行つて、空いた腰掛に腰を掛けて其容子を伺がつた。其處に待ち合せてゐる其々は、重に男が多かつたが、女の顔も少し見えた。

友衛は持つてきた端書を、入口に立つて一々其名を呼んでゐる小使らしい男に渡し、再び腰掛に腰をかける時、自分の横に居る女の顔を見ても無しに一寸見て、忽ちハツと驚ろいた。其女の容子と云ひ、年齢と云ひ、容貌と云ひ、悉く海老原花枝に似てゐないところは無い。彼は女の中に似て居るものが多いたは云ひながら、是程良く似た者は恐らく無いだらうと思ひながら、腰掛に腰をおろして時々其女の顔を盗み見た。

女は偶と憂はし氣な顔を上げて、一寸入口の方を見たが、其目を徐かに友衛の顔に移して、

『もう何時頃でございますか。』と、恐れるやうな、恥かしいやうな容子をして尋ねた。

『さあ。もう一時過ぎたでせうねえ。』と、友衛は徐かに答へて、其女の顔を見上る途端、二人の視線がピッタリ合ふと、二人共恥かしさうに俯むいて了つた。

『もう。那樣に成りませうか。』

女は俯むいたま、微かに云ふのを、友衛は其横顔を見つめながら

『私が此處へ來る時に一時でしたから、もう一時半頃に成るでせう。』

『然様でございますか。妾は十時頃から此處へ來てゐるんでございますけれど、一度も呼出しが無いのでございますよ。』

『然うですか。では、私なども呼出しは五時頃に成るんでせうなあ。』

『怎うでございますか。人に依つて早い方と遅い方がございますよ。』

『然うですか。』

二人がこんな事を話し合つてゐる中に、追々親しく成つて、何事も遠慮なく話し合ふやうに成つた。此女の話に依れば、女の父と云ふのは牛込南町でも、相當に暮してゐるので有つたが、偶とした事が元で脅迫の罪に問はれ、呼び出されたので有るが、相憎病氣のため娘を代理人として出頭させたので有るとか。

此女の身の上話を聞くには聞いたが、友衛は有幣に自分の身の上話をする事を恥

た。友衛の忸怩してゐる容子を見て、女は微かに頷きつゝ、

『始めてのお方にこんな事を申上げて、飛んだ失禮を致しました。』

『いや、何……』と、友衛は狼狽して『お氣の毒な事です。』

『いや、何……』と、友衛は狼狽して『お氣の毒な事です。』
『さう云はれたのが嬉しいのか。女の美しい目からは、露の如き涙が睫を離れて
轉び出た。』

『世の中の人と云ふものは、表ばかり親切らしく見せかけて、其實、皆薄情な人
ばかりでございますわねえ。』

『然うです。世の中の人々の心は衆冷たいものです。人情紙より薄いと云ひなが
ら、人を動かし、世を動かす、達大な力は心の奥から湧出る、眞の人情なのです
其眞の人情を持った人も、此、薄情極まる世の中にも間々あります。』

『ほんとに然うでございますよ。今までは良く家へ出入りをした人でも、一旦父
が病氣に成つて、會社の方を辭めてしまひますと、振かへつても見てくれる人が
ありません。』

『世の中の人々は衆然う薄情な者です。』

『世間の人は、衆然うしたものでせうねえ。』

『然うです。』と、友衛は忽ち思ひ出して『でも、一人ぐらひ御相談相手に成る人
がお有りませう。』

『いゝえ。一人もございませんわ。今では、両親に妾と、未だ幼さい妹の四人暮
りで市ヶ谷左内町に、小さい家を借りて居ります。』

『……………』

友衛は其一言一句を聞く毎に、涙を催さざるを得なかつた。

『で、父は病氣でございますから、他に収入とても無いのでせう。ですから、詮

方が有りませんから妾が、専賣局に通つて、怎うにか怎うにか其月々を送つて居りますんです。」

「實にお氣の毒な事ですなえ。」と、友衛はそぞろ涙に搔くれた。彼女は過ぎ去つた事を追憶して、少時涙を流してゐたが、偶と顔を上げて

「ほ、ほ、ほ。」と、強いて笑顔を作り『失禮な事ばかり申上げて……。』

「いや。聞けば聞くほどお氣の毒に思ひますよ。」

「有難う存じます。眞實然う仰有つて下さいますのは貴方ばかりでございます。と、女はまた涙含んだ。

「穢さ苦しい處ではございますが、お暇の時には怎うぞお遊びにお出下さい。』

「有難う。屹度伺ひます。』

と、云つたが友衛は、もう此處へ來れば今日は歸れないものだと思つてゐるので彼はまた知らず識らず涙ぐんだ。

「妾、怎う云ふ者でございます。」と、女は帯の間から墓口を出し、其内から小形な名刺を一枚出して彼に渡した。

「然うですか。」と、友衛は其名刺に目を落せば『小倉香代子』と、階書で書いてある。

「私は今日、名刺を持つて來ませんから、口で云つておきます。私は桐野友衛と申しまして、淀橋角筈に居りますから、是非お出下さい。』

「有難う存じます。是非お伺ひ致します。」と、女は徐かに云つた。

此時、入口に立つた小使らしい三十餘りの小男は、可笑しな聲を張上げて

「桐野友衛……。』

此聲が友衛の耳に入ると、友衛は今更のやうにハツと首を縮めた。

「はい。」と、競々しながら返事をして、香代子の方に向ひ『一寸行つて來ます。』
「貴方の方が先に成つて了ひましたわね。』

それには答へず友衛は、急いで入口まで行き、其處に脱ぎ散して有つた赤鼻緒の草履を突掛けて、小使らしき男について検事の前へ來た。

『桐野友衛と云ふのはお前か。』

『然うです。』と、書生一流のバキ／＼した調子で口を切つた友衛は、検事の言葉を待つらしい。検事の前へ出た友衛の態度は、裁判所へ來た時の態度とはガラリと變り、もう怖も恐れもしなかつた。彼の心の奥底には、潔よく罪に服するのみ、と、云ふ強い諦めが光が耀いて、全身を支配してゐるのであつたのだ。

友衛は検事に訊問されるまゝ、事の始終を包まず隠さず明白に、答へた上、一々それを書いてゐる書記の横顔を見た。

聞終つた検事は、言徐かに、

『まつたくそれに相違ないか。』

『相違ないです。』

検事も友衛の潔ぎよさに感心して、少時其顔を見てゐたが、やがて重々しい調子で、

『公文書偽造の罪は重いぞ。當方でも成るべく寛大な處置を取つてやりたいが、何うなるか分らん。今日は一先歸宅したまへ。』

『はい。』と、云つたが友衛は、今日此處へくれば、再び今日の中には歸れないとのみ思つてゐたのに、案外にも、一通り訊問された上速かに歸宅を許されたので、殆んど自分の耳を信じきらぬ程驚いた。

『歸つても可いのでせうか。』

『あゝ。いづれまた呼出しが有るであらうが、今日は歸宅しても可い。』

『然うですか。』と、友衛は衝と立上り、検事に一禮して立去る時、偶と横に香代子と云ふ女が、腰掛に腰掛けてゐるのを見た。

友衛は再び元の控所らしき處へ來て、少時待つ程も無く香代子と云ふ女は出てき

た。

『一緒に歸りませう。』

『え、どうぞ……』と、ばかり香代子と云ふ女は、友衛と連立つて裁判所の門を出で、それから真直に電車通りへ出た。

『もう、降らないでせうねえ。』

『もう、降らないでせう。だんく〜晴て来ますからねえ。』

丁度、二人が停留場のところまで来ると、向方から電車が来たので、二人は共に乗り込んだ。

残暑

酷暑の候の土用も早くも過ぎ、残暑とは云ひながら土用にも増る酷しい暑さの八月中旬すぎ。

富士見町の下宿屋を引き拂つて、千駄ヶ谷の素人下宿屋に引き移つた中澤兼一は今日も朝から友人の、關根達次に押寄せられ、もう、四合入れの麥酒瓶も三本ばかり空いてゐる。

あたりは静かな大きな邸ばかりだが、其邸内の木々の梢に蟬の聲が、大分喧しく成つた十時頃、軽い歩調で階段を昇り盡して、凜と引き緊つた友衛の顔が現はれた

『やあ。色男う……。』

と、達次は友衛の顔を見るより早く、大きな聲で恚う云つた。

『また。』と、友衛は苦笑して、二人の傍に坐り、

『朝から上景氣ですねえ。』

『餘り景氣も良くないよ。』と、中澤は心持ち赤く成つた顔を撫で、云ふ。

「さあ。色男。一杯差さう。」

「僕は不可ないのです。」

「酷しいなあ。」と、達次は笑つて「那樣固い事を云ふなよ。」

「いや。まつたく駄目です。」

此時、中澤は急に横から、

「關根。桐野はほんとに駄目なんだ。」

「然うか。では止むを得ん。」

と、達次はコップに残つた麥酒を飲み干して「桐野君、餘り女を苦しめるなよ。」

「あゝ。また……。」と、友衛は迷惑さうな顔をする。

「いや。此度のは眞剣だぞ。僕の妹なんかも豪く温度が昇つてゐるぞ。」と、達次は扇子で慌たしく風を入れ「一旦君の事を云ひ出せば、妹の奴め耳糞をほじつて聞いてゐるからなあ。」

「もう澤山ですよ。」と、友衛は苦い顔をして云ふ。

「もう止さう。那樣に君を苦しめるのも罪な話だ。」

「で、中澤さん。今朝京都から恁ういふ手紙が來たんですよ。」

「何だ。阿母さんが上京されると云ふのだらう。」

「然うです。」

「それならば僕の處へも來たよ。」と、懷中から手紙を出して「これだ。」

友衛は自分が持つてきた手紙を中澤に渡し、中澤から出した手紙を受取つて、讀下して見れば、自分の處へ來た手紙と大した變りは無かつた。

「同じやうな手紙ですなえ。」

「然うだ。變りは無いねえ。」

「明日の午前六時着ですなえ。」

「うむ。」と、中澤は大きく云つて「明日一緒に行こう。」

友衛は微かに頷いて達次を見た時、達次は口の中で琵琶歌を歌つてゐたが、少時経つとそれも止して、

『怎うも不可ん。』

『何が不可ないのだ。』と、中澤は訝かし氣に聞く、

『何がつて、僕のやうな貧乏畫家ぢや何とも詮やうが無い。』

『貧乏畫家は同じ事さ。』と、中澤は少しも取合ない。

『貧乏畫家に貧乏書生か。』

『は、は、は。丁度可い會見だよ。』と、中澤は大聲揚げて笑ふ。

『おい桐野君、君は近頃大分琵琶が上手く成つたさうだが、一曲やつて聞かせな
いか。』

『いや。駄目ですよ。とても一人前には行きませんから。』

『いや、然うでもあるまい。』

『本當ですよ。此方の方は中澤さんが上手いですよ。』

『中澤のは度々聞いたが、君のはまだ一度も聞いた事が無いから是非一曲頼む。』
と、達次は床の間に有つた中澤の琵琶を持つてきて彼に渡した。

『駄目ですよ。』と、友衛は琵琶を置きかけるのを、中澤は急に止めて、

『桐野。一曲やれよ。』

『然うですか。何をやりませう。』

『然うだなあ。』と、達次は本をひろげて、

『橋大隊長でもやつて貰はうか。』

『すいぶん長いですよ。』

『長い物はご可いのだ。』

友衛は中澤の立派な琵琶を持つて、音色を合せ始めた。

x x x x x x

朝、八時を少し過ぎた頃、兄の達次と共に家を出た滋子は、花枝の處へ行くと言つて兄に途中で別れ、花枝の家へ訪れた。

『まあ。良く被在つてねえ。お上り成さいよ。お盆過ぎから少しもお目にかゝらなかつたわねえ。』と、花枝は自分の親友を心よく迎へ、いろいろ滋子を饗應した。『どうぞ、お構ひなく。那樣に構つてゐたゞきましては、もう來られなく成つて了ひますから。』

『お構ひするつて、何も出來はしませんわ。』

其處へ突然兄の常正がはいつてきて、滋子を見るより早く、

『いよう。お客様か。』

『毎度お邪魔に上りまして……。』

『今日は兄さんは？』

『お友達の處へ遊びに行きました。』

『然うですか。兄さんに少しお出かけなさいと云つて下さい。』

『え、有難う存じます。』

『大にお邪魔。』と、常正は花枝の顔を横目に見て出て行つた。

『可厭な兄さん……。』と、花枝は眉根を寄せて笑ひながら『あれから貴女何か縫つて？』

『え、單物を二枚ばかり。』

『然う豪いわねえ。妾などはまだ一枚も縫はないのよ。』

『お忙がしいからねえ。』

『いゝえ。それで少しも忙がしくないのよ。』

『偽でせう。』

『いゝえ。ほんとなの。』

『何だか……。』

「まあ。疑ぐり深い人ねえ。那様に疑がうなら持つてきて見ませうか。」

「えい。」

花枝は一寸茶の間へ駆込んだが、直ぐ風呂敷包を持つて出てきた。

「ほら御覧なさい。」

滋子は其包を擴げて見てゐたが、徐かに其包を脇へ押退けて、急に小聲に成り

「あのねえ、花枝さん。今日桐野さんは家に居て？」

「さあ怎うですか。」

「家の兄さんはねえ。桐野さんのお友達の處へ行つたのよ。」

「へえ。」と、花枝は啞然たらざるを得なかつた。

「それもねえ。桐野さんと一番仲の良いお友達なの。」

「へえ。」と、ばかり花枝は益々啞然とした。

友衛の一番仲の良い友達で、滋子の兄と水魚の交りをしてゐる者が有らうとは、

今まで友衛からも聞いた事が無いので、彼女が啞然とするのは無理も無かつた。

友衛と自分との間には秘密が無い筈であるのに、何故友衛はこんな事を隠してゐるのだらう。何につけても友衛は水臭い事ばかりをしてゐると彼女は思った。

「で？ 友衛さんの、お友達は何と云ふ人なの？」

「中澤兼一と云つてやはり畫家なの。」

それも知らぬ。花枝は、嘗て友衛からこんな人の名を聞いた事が無かつた。

「貴女も知つてるわ。」

「妾か？……。」

「えい。」

「妾は那樣人は知らないわ。」

「いゝえ。知つてるわ。」

「……………」

『あの……いつか二人で裁縫を習ひに行く時、新町へ出る角の處で池島さんの道
を聞いたでせう。其人よ。』

『あゝ。』と、花枝は始めて合点行つて『あの人なの！』

其日の事ならば花枝は、一生忘れる事の出来ない日なのだ。其時逢つた人が中澤兼
一と云ふ人ならば、自分も確かに知つてゐる。けれど其人と、滋子の兄とが水魚の
交りをしてゐるとは思はなかつた。否、全然其方へは考へを及ぼさなかつた。

『では、貴女の兄さんと友衛さんともお友達に成つて了つたでせう。』
『えゝ。もう疾くに成つてゐるわ。』

『然うでせう。だけど、妾は少とも知らなかつたわ。』
『あら！ 友衛さんからお聞き成すつたでせう。』

『いゝえ。』

『まあ。』と、憫れて『すいぶん水臭い方だわねえ。』

花枝はホロリとした。友衛の水臭い事が知らぬ他人にも見えるかと思ふと、彼女
は我事のやうに情なかつた。

『貴女は然う思はなかつて？』

『それが彼人の氣性なんですもの……。』

花枝は苦しい答辯をした。

『物事に構はない人なんですわねえ。家の兄さんも然う云つてゐたわ。桐野君は
氣が大きくて、落付いてゐるつて……。』

『然うですか。』と、花枝は晴やかな顔をして『ほんとに然うなのよ。妾たち見た
いに、細かな處まで考へてくよくよしてゐるやうな人ぢや無いのよ。それです
から、家の兄さんは始終賞めてゐるのよ。』

『やはり、女はそれだけ氣が小さいのねえ。』

『怎うしても、男から競べるとねえ。』

「桐野さんも、此頃はまた前のやうに固くお成り成すつたのねえ。」

「え、」と、花枝は餘り滋子が大きな聲を出すので冷々しながら、それでも此ばかりは聞捨てに成らなかつた。

「でも、桐野さんもお可哀さうねえ。池島さんの家の者が衆で邪魔者扱ひにして……。」

花枝は又、ホロリとした。左に右、花枝に取つては、池島一家の者が憎くて成らなかつた。それは多少清子に對する嫉妬心も有るけれど、其重なる原因は、友衛が餘りに苛酷に取扱はれるのに依るのだ。

「ねえ。」と、滋子は一段注意を促がすべく聲をかけ、

「家に恚うしてゐてもつまりませんから散歩に行きませうよ。」

「日中？」

花枝は驚いて滋子の顔を見目茂る。

「日中だつて可いちやありませんか。」
「え、ちや行きませう。一寸待つて、頂戴な。」と、花枝は茶の間へ引きかへす其後で滋子は懷中鏡を取出して、徐かに紙白粉を出し、汗のにじんだ處を拭いた。

魔の手

「なあ。おい。何時までこんな事もしてゐられないぢや無いか。」

白い詰襟の夏服を着た山川有伸は、壯士然たる長谷川吉藏の顔を見詰めて云つた「全然怎うも詮やうが無い。」

長谷川は力なく云つて、近くの家の二階より、微かに流るゝ琵琶の弾する音色に

耳を傾むけて聞いてゐた。

■ 魔の手

「おい。何を茫然してゐるんだ。」

「お前には聞えないのかい？ 彼の琵琶が。どうだい。可い音ぢやないか。トンシヤン、チンチヤン、トシヤンチンチン。」と、長谷川は口で琵琶に合せながら「上手いねえ、何をやってゐるんだらう？」

云はれて見れば成程、冴えた琵琶の音色が流れてくる。

「ヘン。あんな琵琶を聞くよりも、時計屋の前で蓄音器の浪花節でも聞いた方が餘程可いや。」

「おい。書生に化たら書生らしくしろよ。浪花節を聞きたいなんて云ふと鍍金が剥るぞ。」

「おつと、来た。」と、山川は猪首を縮める。

「良く聞け。今が崩れだ。」

「崩れつて何だい？」

「分らねえ奴だなあ。琵琶の音を聞けよ。」

「成程な。有繫は好きな物だけ有つて違ふなあ。」

「ふ、む。橘大隊長をやつてるんだなあ。」

「何？ 橘大隊長？ そいつは聞捨には成らねえ。琵琶ちや橘大隊長に石童丸だねえ。」

「ヘン。」と、長谷川は嘲笑「お前見たいな悪黨にも然ういふ物が好きか。」

「悪黨でも人情には變りは無いよ。」

「何とか云つてやがらあ。」

「何でも可いから傍へ行つて聞こう。」

「止せ。ほら見ろい。行かねえ中に終りを告げて了つた。」

「では、そろく桐野の所へ行つて少し借て來やうか。」

『然うでもしなければ、やり切れない。』

『行こう。』

『よし、来た。』

二人は静かに木の下を出て往來へ出た。

『暑いなあ。』

『諄くなよ。滿洲よりいくらか可いや。』と、山川は扇で風を送る。

二人は此暑さに弱りつゝ、二三間も来た時、五六間向方の二階建の家から出た友衛の姿を認めたので、二人は直と足を停めた。

『呀！ 桐野。』

『うむ。天の助だ。』と、長谷川は凄い笑を洩らした。

『追駈ろ。』

二人は韋駄天走りに駈出して友衛の後から、

『おい桐野！』

呼ばれた聲は百雷の、落ちたかと思はれる程、友衛の耳に感じた。しかし、知らぬ顔をして行く事も能ないので、友衛は騒ぐ胸を無理に押へて振り向きさま、

『おう。これは珍らしい。』と、詮方無く云つた。

『うむ。實際珍らしいよ。何しろ一月ばかりも逢ないからなあ。』

毒々しく云放つ長谷川の顔を、友衛は冷やかに見たまゝ、終に何とも答へなかつた。

『こんな處に立つて話をしてゐたのちや暑くて不可ん。歩きながら話さう。』

三人は各々苦りきつた顔をしながら、徐かに歩き出した。

友衛は自分をして裁判所まで通はした此の二人の顔を見ては、彼を思ひ是を思ふ彼の胸は、亂れし糸のその如く掻き亂れた。

今しも三人が通りから日除の原にはいつた時、長谷川と山川は云ひ合せたやうに

立止つて、

團圓の手

『暑い！こゝらで少し休んで行こうよ。』

二人は木蔭をたどつて腰をおろした。

『僕は少し急ぐから……。』

『おい待て、待て。』と、山川は慌て、呼び止める。

慍う呼び止められて見ると、無下に行く事も出来ないで、不承無承二人の傍に

り、

『何だね？』

『少し頼みたい事が有るんだ。』と、長谷川はそろ／＼切り出す。

『……。』

儲こそと、彼の心は一層亂れた。

『君か先刻琵琶をやつてゐたのは？上手いねえ。』と、山川は徐かに汗を拭きつ

云ふ。

『……。』

それでも友衛は答へなかつた。

『どうした、桐野！あれから後は？』

『餘談は御免蒙る。それよりも、君が頼むと云ふ事を聞こう。』

友衛は此時漸く心を落着け、一生通じて自分の記憶から取去る事の能ぬ——それ

も今では彼等二人に對する不快と恨みと、自分に對する悔との情が、憎惡の形に固

まつてゐる——其長谷川吉藏、山川有伸の二人顔を正面に見つめた。

『怎うも、酷しいなあ。』と、長谷川は冷笑しつゝ、『では話をするが、其前に、君

に一寸聞いて貰はなければ成らぬ。僕等二人が頼む事に就て、何事も友人と云ふ

點に重きをおいて貰ひたいね。』

『よろしい。能得る限りは……。』

團圓の手

「今まで冷やかで有つた山川の目は、忽ち鋭い光を放つた。」

「能得る限りぢやない。絶対に然うして貰ひたい。」

「それも事と次第によりけりだ。」

「何？」と、山川の顔色は颯と變つた。

「もう、一度云ひて見る。」

「何度云つても同じ事だ。」と、友衛は冷やかに云ひ切る。

「貴……。」と、云ひかけるのを長谷川は手で押へて、

「能得る限り然うし……くれる？ 有難い。」

「疾く頼みと云ふのを云つてくれ給へ。先刻云つた通り僕は少し急ぐから。」

「成程。」と、長谷川は急に氣が注いだらしく「では、話をするが、君！ 僕等二人に少し金を貸してくれんか。」

「……………」

友衛は、厚顔しくも良くこんな事を云へたものだ。頓には答へも出なかつた。

「それも多くとは云はん。二人で五圓有れば可いのだから。」

「……………」

「十五日後には屹度返済する。」

「……………」

友衛は地上を見つめたまゝ、何も答へなかつた。

「怎うだらう？」

長谷川は相手がいつまで経つても黙つてゐるので、多少焦氣味に成つて云つた。

「お断りをする。」

「可けないのか？」

「断る。」

「だがねえ。是がたくさん貸せとでも云ふのなら、君も困るだらうが、高が五圓

だ。君の望に依つては証文を入れても可い。

『那樣ものは慾しくない。』

友衛の云ひかたは益冷やかだ。

『では、証文を入れやうと云つても貸す事は能ないのだね。』

『其通り。』

『桐野！』と、長谷川は有繋に沸然として『友人云ふものは、困つてゐる時は助け合ふのが友人の義務だ。然るに君は僕等が困つてゐるのに金を貸さないと、今將に水に溺れやうとしてゐるもの、傍を通りながら、是を助けやうとせず、冷やかに見て通るのと同じだ。桐野！ 君は友人に對す義務を無視してゐないかね？』

『怎うだらう。』と、友衛は極めて冷然として、二人の顔を見た。

『無視してゐるだらう。』

『然うかね。』

『君には分らんか。』と、長谷川は一人焦燥して『怎うだ？』

『僕には分らん。』と、友衛は一段言に力を籠め『しかし後の口が煩いから云つて置く。』

『よし、聞こう。』と、二人は屹となる。

『僕はね。今までのやうに君等と親しくしてゐたのなら。此求要にも應じやう。けれど、君等には宣言しなかつたが、僕は心で君等と絶交の宣言をしたのだ。絶交さへして丁へば君等と友人でも何でもない。従つて君等の要求に應ずる事は能ないのだ。こゝまで云つたら、ともての事に云つて置こう。僕は溝に捨る金が有つても、君等に貸す金は持つてゐない。』

此二人に對する恨怨が、其言の節々に現はれて、云ふ言も自然荒く成つた。

『何？ 利いた風な』とは云つたもの、長谷川も山川も後が續かなかつた。

「これだけ云つたら僕も胸の雲が晴れた。さあ。君等の方でも云ふ事が有れば聞こう。」

「おう。此返報は恚うしてくれる。」

と、長谷川は、片手に持った握太の洋杖を取直すより早く、真甲に振翳し、あはや打おろさうとする途端、長谷川の襟首を無手と掴んだものがある。

呀、と二人も驚けば、意外の男が飛び出したので友衛も驚いて、其男の顔を見て再び呀と驚いた。

「やあ。俊一君。」

「おう。友衛君。」と、俊一は掴んだ長谷川吉藏をする／＼と引摺つて友衛の傍に
より、

「こらつ！ 吉！ 貴様は未だ心を改めぬな？」

大蛇に巻つかれた小兎の、腕けば腕く程次第に強く締付られてゆくやうな長谷川

の容子を見て云つた。

「別に何にも悪い事は……。」と、長谷川は苦しうに云ふ。

「偽を吐け！ 今此處で何と云つて居た。」

今まで傍で其成行きを見てゐた山川は、自分の味方の旗色が悪いので、今は黙つてゐる事も能ず、矢庭に俊一の後から飛ついた。

「何を！」と、見返る途端、掴んだ手の緩みを見はからつて長谷川は、漸くの思

ひで俊一の手から離れた。

「先生！」

「何だ。」

俊一は六七間離れた長谷川の顔を見る。

「大きに有難う存じました。此お禮はいづれ其中に致します。」

「おう。能るものならして見ろ。」

百七十四
「俺も男だ。屹度する。」と、云ふより早く長谷川は、山川と二人で今来た方へ駈出した。

「俊一君。知つてゐるのかい？」

「一人は知らんが、長谷川の野郎は知つてるよ。僕が満洲に居た時に僕の所へ泣いてきた奴だもの。」

「へえ。」と、友衛は呆れた。

「氣を注げなくては可けないよ。」と、俊一は二人が逃去つた後を見て「彼奴は拘摸だからねえ。」

「え！」

「那樣事は悠然後で話すよ。」

「一緒に歸らう。」と、友衛は俊一と、肩を並べて行く時、微か向方に花枝と滋子が、木蔭にやすんでゐる容子を見て、思はず顔を赤らめた。

初対面

友衛の母の直子が東京へ来てから四日目の朝、友衛は東京地方裁判所へ召喚された其後で、直子が止宿してゐる——新宿停車場前の旅館、清風樓へ衝とはいつてゐたのは、中澤兼一を始めとして、常正、花枝の兄妹である。直子が此旅館に止宿してから、中澤は度々來てゐるので、旅館の女中共は愛相よく是を迎へたが、中澤の後から尾いてきた常正と花枝の姿を見て、種々な噂をし合つた。

二階の裏庭の方に面した、風通しの可い一間で、直子は只一人茶を飲んでゐたが三人のはいつて來る容子を見て、徐かに此方へ向直つた。

「昨日、關根に頼んで置きました方は、萬事都合よく運びまして、今朝海老原さ

「ん御兄妹にお逢した上、お伴ひ申しました。」と、海老原兄妹を顧て「此方が海老原さん御兄妹ですから。」

「然うですか。御苦勞でした。」と、直子は自ら座蒲團を三人にすゝめて「初めてお目にかゝります。妾は友衛の母でございます。」

「私は海老原常正です。どうぞ宜しく。又是に居りますのは私の妹で花枝と云ひます。」

此時、花枝は少し前へ進み、

「妾、花枝と申します。」とは云つたが、彼女の心臓は忙しく刻んでゐる。

彼女は此旅館へ来るまでは、種々な方面から直子を想像して、逢ふのが恐ろしやうでもあり、また、逢つて見たいやうな氣もしたのであつたが、今日の前に其人と話をしてみれば、優しい人なので、花枝は發と安心した。けれど、激しい胸騒ぎは未だ止まぬ。

「然うですか。毎度友衛がお世話に成りましたさうで、此母から厚くお禮を云ひます。」

徐かに落着いた調子で云ふのに反して、花枝は冷りとした。

「朝から今日は蒸ますねえ。」と、中澤は所在無げに口を切りつゝ、徐かに巻煙草を喫らす。

「然うです。今日は昨日より暑いですねえ。」

「まつたく暑い。」と、中澤は忙しく扇子を使ふ。

花枝は此時漸と安心した。今までは、友衛と自分との關係を聞かれるかと、絶へず冷々してゐたが、中澤の爲に急に話が他道へ外れたので。

「京都の方は是で、其割に暑くはありませんけれど、東京へ着いた時にはほんと驚きましたよ。」

「へえ。京都より東京の方が暑いですか。」

常正は驚きの目を睜る。

『京都の割に暑いやうな気がしますねえ。』

『はあ。』と、常正は徐かに貰の灰を落しつゝ、『近年に無い暑さですからねえ。』

花枝は三人の話を聞くのみで、終に一言も口へは出さなかつた。

直子は花枝の一舉一動に注意してゐたが、池島の清子から比べると、万事清子よりも温和なので、彼女は知らず識らず微笑んだ。

直子は一寸花枝の方を見たが、其目を直ちに常正に移し、

『海老原さん。今朝中澤さんから、花枝さんと友衛の事に就て、一應お話が有つたと思ひますが。』

『はい。確かに有りました。』

『然うですか。それならば花枝さんにお聞きします。』と、直子は花枝の方に向直つた。

『はい。』花枝は再び冷りとして『何でございませう。』
『貴女と、友衛と何か深い關係が有るやうに聞及びましたが、其事をお聞きしたいのです？』

『はい。それは確かにございます。』

と、云つたが、花枝は初めて何時ものやうな落着いた心に成得た。寧ろ何時もの時よりも、一層強く成得たと感じた。そして、池島一家の者が、友衛を苛酷に扱ふ事から、それに對して自分が、友衛に同情してゐたのが元で、終に固く誓合つた事等、總ての人情を具さに語つた。

其熱心と云ひ、筋が立つて少しの澁みも無い話しかたといひ、長物語の節々に自から現れる赤心といひ、初めの中こそ多少の疑念を挾んで聞いてゐた直子や中澤でさへ、次第に其熱辯に引き入れられて、思はずホロリとする事も度々有つた。花枝が話し終ると共に中澤は

「偉い！今の婦人には珍らしい心掛だ。偉い！感心した！」
餘りに大きな聲を立てられたので、花枝は少なからず面くらつた。

「然うですか。」と、直子は感極まつた聲で「然ういふ花枝さんの心に引競べて、彼の友衛は何といふ意氣地の無い男でせう。高が苛酷に扱はれた位で自棄に成つて墮落すとはほんとに呆れて了ひます。」

「でも、それは詮方が……。」と、花枝が云ひかける時、突然中澤が大きな聲で

「いや！桐野が墮落した原因はそれも有るでせうが、他にもつと深い原因が有るんですよ。」

「え？」と、三人は等しく中澤の顔を見目茂る。

「成程。池島さん一家の者に苛酷に扱はれたのも其原因でせう。清子さんを押しつけやうとしたのも其原因でせう。だが、水は其器に従ふです。桐野が墮落した眞の原因は其友が悪かつた爲です。桐野が如何に白くても、周圍に居る者が黒か

つたら、忽ち其色は白いものに染み込みます。」と、中澤は一段聲に力を籠め「大きな聲では云はれぬが、桐野が裁判所へ召喚されるやうな羽目に成つたのも、皆山川有伸とか云ふ者に欺むかれたのです。」

「え！」と、花枝は仰反るばかりに驚いて「あの……友衛さんが裁判所……。」

「花枝さん。」

力の無い聲で其名を呼んだ直子は、湧出る涙を押拭つて、

「恚うなつたら何事も隠さず云つて了ひませう。貴女もさぞ愛想が盡たでせう。友衛は公文書偽造とか云ふ罪名で、裁判所へ呼ばれたのです。先月の十五日に一度呼出されて、今日また地方裁判所から呼出されました。無罪に成るか何うかは今日歸つて來なければ分かりませんが。無罪に成らなければ前科者、那樣者と約束成すつた貴女がお氣の毒ですから、今日限り友衛の事は忘れて下さい。」
花枝は少時袂を顔に押當て泣き伏してゐたが、やがて、徐かに身軀を擡げ、涙に

濡た顔を上げ、

『いゝえ。』と、髪かみの壊こわれる程頭ほどを掉おとつて『たとへ、友衛ともゑさんが前科者ぜんかものにお成り成なさらうとも、今更氣いまさらきを變かるやうな那樣そんな……浮ういた女おんなちやございませぬ。それも……それも、友衛ともゑさんが、お前まへのやうな女おんなは不厭ふえんに成なつたと仰おつしや有れば詮方しかたがありませぬけれど、然さうでない以上いじやうは別わかれるのは不可いです。それなのに、今更いまさら忘れて了しまへとは、それは餘あまりでございませぬ。』

『……………』

『あ……餘あまり……でございませぬ。』

そゞろに繰返くりかへした花枝はなえは、再び其處そこへ泣なき伏ふした。中澤なかざはと常正つねまさは感かんに打うたれて、頓とんには何なんとも云いへなかつた。只涙ただなみだの満みた目めと目めを見合みあはすのみ。直子なほこは少時しばらく目を押おへて啜泣すすりないてゐたが、やがて、顫ふるえを帶おびた聲こゑで

『それは我子わがこの爲ためですもの。誰たれが好き好このんで忘わすれてくれと云いひませう。只貴方ただあなたが

お氣きの毒どくだから……。』

『いゝえ。』と、花枝はなえは顔かほも得あげず『妾わたしの爲ためを思おもつて下くださる其お心こころが、却かへつて妾わたしは恨うらめしいのです。情無なさけないのです。』

『貴女あなたの優やさしい心こころを思おもふにつけても、友衛ともゑの心こころが憎にくらしい。妾わたしは彼かれが無罪むざいに成なつて歸かへつて來くるのを待まちつてゐます。』

直子なほこは慙かう云いつて激げきしく身みを顫ふるはせた。いくら友衛ともゑの無事むじを待まちつてゐても、慙かうしてこれが無事むじで濟すまう。直子なほこも花枝はなえも慙かう思おもふと、今一度いま友衛ともゑの顔かほが見みたかつた中澤なかざはは二人ふたりの容ようす子すを見てゐたが、思おもひ出だしたやうに小膝こひざを叩たたき、

『今更いまさら然さういふ事ことを仰おつしや有つても歸かへらぬ事ことですから……。』

『あゝ、然さうです。くだらぬ泣なき言ことを云いつても返かへらぬ事ことですから、もう止とめませう。』と、直子なほこは忙せしく目めを押おさへる。

『それに就ついて、先刻さつきの事ことを仰おつしや有つたら如何どうです。』